菊鹿町文化財調査報告　第９集

鞠智城跡

―町道稗方立徳線付け替えに伴う上原地区の埋蔵文化財調査―

２００１年

熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

菊鹿町文化財調査報告　　第９集

鞠　智　城　跡

―町道稗方立徳線付け替えに伴う上原地区の埋蔵文化財調査―

２　０　０　１　年

熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

序　文

菊鹿町には、九州でも数少なく、県下では唯一となる古代山城の鞠智城があります。その城域は菊鹿町のみならず菊池市にも及ぶほど広大なものです。平成6年度からは熊本県による鞠智城跡整備事業が本格的に実施され、城の中心であった長者原地区には現在3棟の建物が復元されています。

このたび、復元された八角形鼓楼付近の町道を付け替え、交通の安全をはかる工事が計画されたため、鞠智城内上原地区について埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。調査では鞠智城時代の建物は見つかりませんでしたが、弥生時代の住居跡や甕に石の蓋をかぶせた墓が発見されました。

本書が今後の一層の調査・研究の進展と、文化財に対する理解と保護に役立てられる一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査を行うにあたり御協力をいただきました地元の方々など多くの関係者の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成１３年３月３１日

菊鹿町教育長　中　原　哲　哉

例　　言

1．本書は平成13年度に菊鹿町教育委員会が行った鞠智城跡上原地区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書で使用した方位は国土座標を用いた。

3．現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは調査員が行い、国土座標を用いた調査区設定と地形図作成には株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の補助があった。

4．遺物実測は主に古閑敬士、中内百恵が行い、遺物・遺構などのトレースは主に曽我敬子、川上寧子、金光里美、徳永澄子、中内百恵、源香織が行った。

5．図版の遺物写真は甕棺約１／４、黒曜石製の石器・勾玉約１／１、その他の遺物約１／３の縮尺である。

6．出土遺物は菊鹿町教育委員会で保管している。

7．本書の執筆・編集は古閑が行った。

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要
　第1節　調査に至る経緯・調査の組織
　　1．調査に至る経緯・・・・・1
　　2．調査の組織・・・・・1
　第2節　調査の方法
　　1．調査の方法・・・・・4
　　2．調査経過・・・・・4

第Ⅱ章　調査の成果
　第1節　弥生時代の遺構と遺物・・・・・5
　第2節　その他の遺構と遺物・・・・・17

第Ⅲ章　まとめ・・・・・32

挿図目次

第1図　鞠智城位置図・・・・・2
第2図　調査区位置図・・・・・3
第3図　上原地区基本土層図・・・・・4
第4図　1号甕棺実測図・・・・・5
第5図　出土甕棺実測図・・・・・6
第6図　1号・2号竪穴住居実測図(1)・・・・・7
第7図　1号・2号竪穴住居実測図(2)・・・・・8
第8図　3号竪穴住居跡遺物出土状況・断面図・・・・・10
第9図　3号竪穴住居跡実測図・・・・・11
第10図　3号竪穴住居跡出土土器実測図・・・・・12
第11図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図・・・・・13
第12図　4号竪穴住居跡実測図・・・・・15
第13図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図・・・・・16
第14図　1号掘立柱建物跡実測図・・・・・18
第15図　土坑実測図(1)・・・・・19
第16図　土坑実測図(2)・・・・・20
第17図　3号土坑出土遺物実測図・・・・・21
第18図　上原2区遺構実測図・・・・・22
第19図　上原3区遺構実測図・・・・・23
第20図　上原4区遺構実測図・・・・・25～26

第21図　上原５区遺構実測図・・ 27
第22図　調査区出土石器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第23図　調査区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

図　版　目　次

図版１　上　調査区全景（南西から）
　　　　中　調査風景
　　　　下　上原地区基本土層
図版２　上　甕棺検出（東から）
　　　　中　甕棺石蓋除去（北から）
　　　　下　甕棺接写（南から）
図版３　上　１号竪穴住居跡　炭の集中（南から）
　　　　中　１号竪穴住居跡（西から）
　　　　下　２号竪穴住居跡（西から）
図版４　上　３号竪穴住居跡　断面（南から）
　　　　中　３号竪穴住居跡　鉄製品出土状況（北から）
　　　　下　３号竪穴住居跡（東から）
図版５　上　４号竪穴住居跡　検出（北から）
　　　　中　４号竪穴住居跡　土器出土状況（東から）
　　　　下　４号竪穴住居跡（東から）
図版６　上　上原３区全景（東から）
　　　　中　上原４区全景（東から）
　　　　下　上原５区全景（東から）
図版７　上　１号土坑（西から）
　　　　中　２号土坑（西から）
　　　　下　３号土坑（西から）
図版８　上　４号土坑（南西から）
　　　　中　５号土坑（北から）
　　　　下　６号土坑（西から）
図版９　上原２区出土　甕棺
　　　　３号竪穴住居跡出土土器
図版10　３号竪穴住居跡出土土器
　　　　４号竪穴住居跡出土土器
　　　　３号土坑出土土器
図版11　調査区出土遺物

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯・調査の組織

１　調査に至る経緯

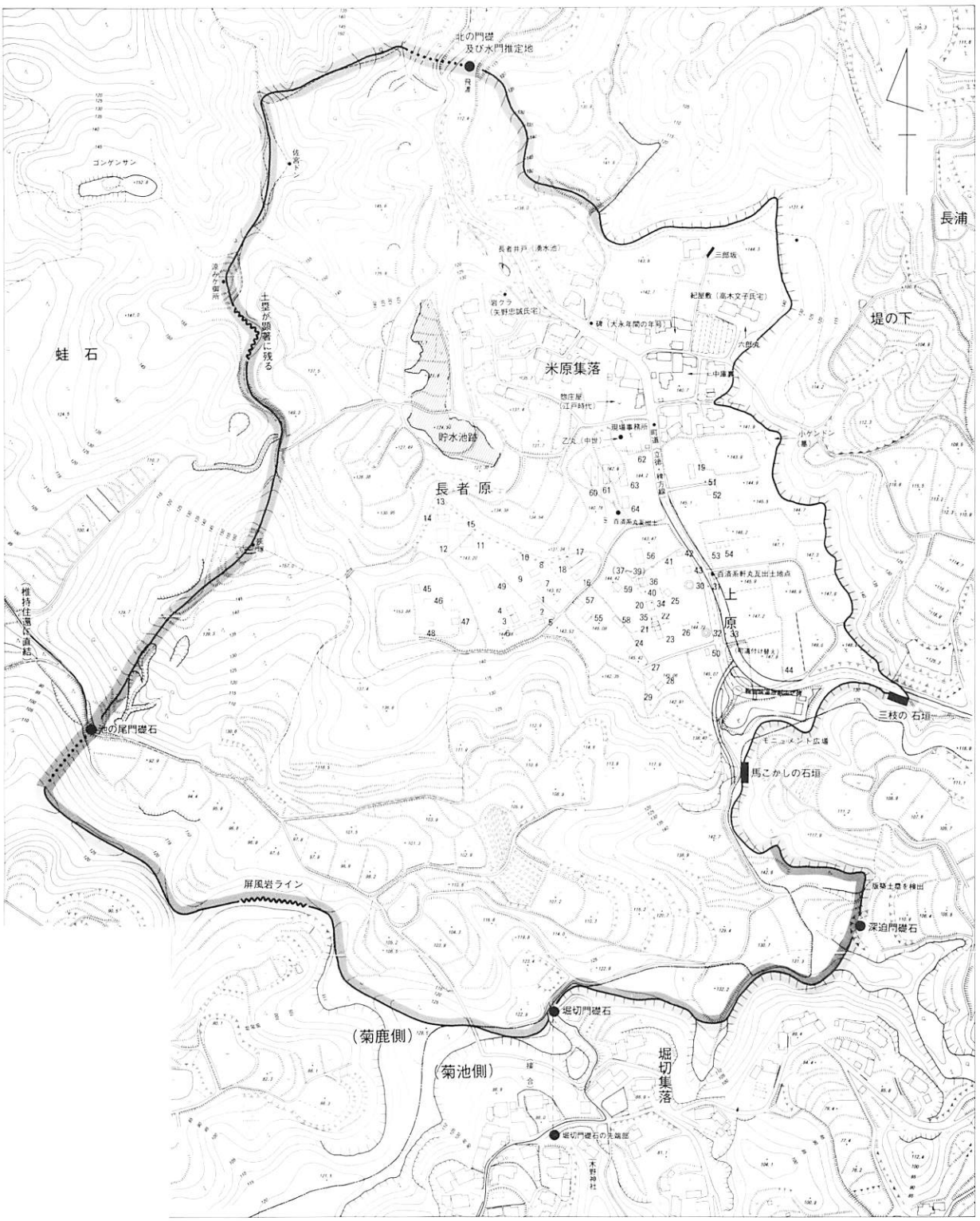
県道稗方立徳線は菊鹿町松尾から鞠智城跡のある米原の集落を通り、菊池市稗方までつながる道路である。この道は鞠智城跡を南北に通る、重要な生活道路である。しかし、この道は鞠智城跡内の八角形復元建物付近で大きくカーブしており、立徳方面からモニュメント広場の駐車場や堀切集落へと通じる道への右折は見通しが悪く大変危険であった。この状況を改善するため、一段高くなっている上原地区を削り、カーブを直線にし、視界を確保する工事が計画された。菊鹿町教育委員会では上原地区が古代山城の鞠智城内にあることから、鞠智城跡の発掘調査と整備を行っている県文化課と協議を行い、県文化課は平成11年11月12、17日に試掘調査を実施した。この結果、試掘トレンチの多くでピットと考えられる黒色土や土器が発見され、発掘調査をおこなう必要があることが判明した。

２　調査の組織

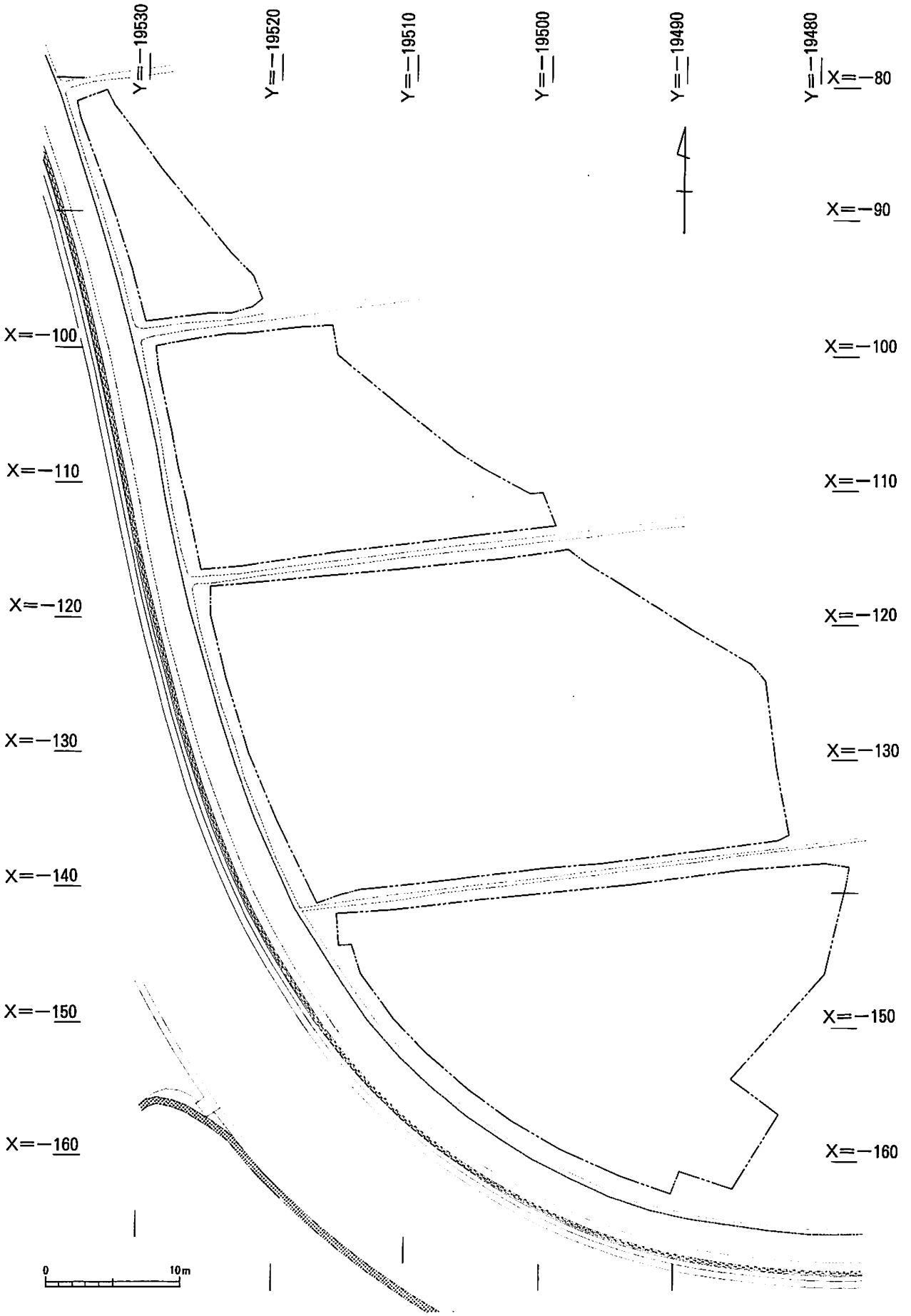
調査主体	菊鹿町教育委員会
調査責任者	平嶋　靖弘（菊鹿町教育長・～平成１２年９月）
	中原　哲哉（菊鹿町教育長・平成１２年10月～）
調査事務	岩井　賢太（社会教育課課長）
	冨田　弘海（社会教育課係長）
	中野　正治（社会教育課主査）
調査担当	古閑　敬士（社会教育課嘱託）
試掘・調査指導・協力	大田　幸博（県文化課課長補佐）
	西住欣一郎（県文化課参事）
	矢野　裕介（県文化課学芸員）
	鞠智城跡現場事務所

調査作業員

飯田　逸雄	片山ケイ子	片山　通代	金光　賢典	小澄シズ子	坂本　清子
坂本　友子	坂本　初男	桜井　梅子	高木　文子	立花　安喜	中原　一彦
松本　君子	松本トミ子	松本　久子	村上　義秋	森田　幸子	森田　徳行


北の門礎
及び水門推定地
ゴンゲンサン
長浦
長者井戸（湧水点）
三郎坂
紀屋敷（高木文子氏宅）
岩クラ
（矢野忠誠氏宅）
碑（大永年間の年号）
六郎丸
堤の下
蛙 石
土塁が顕著に残る
米原集落
中庫
惣庄屋
（江戸時代）
現場事務所
貯水池跡
乙丸（中世）
小ゲンドン
長 者 原
上
原
三枝の 石垣
モニュメント広場
馬こかしの石垣
池の尾門礎石
屏風岩ライン
深迫門礎石
堀切門礎石
（菊鹿側）
（菊池側）
堀切集落
木野神社
0
200m

第１図　鞠智城位置図


Y=−19530
Y=−19520
Y=−19510
Y=−19500
Y=−19490
Y=−19480
X=−80
X=−90
X=−100
X=−110
X=−120
X=−130
X=−140
X=−150
X=−160
0
10m

第２図　調査区位置図

第２節　調査の方法

１　調査の方法

調査区設定（第２図）

水田の畦にあわせて北から上原１区～５区までを設定した。１区に関しては、調査区自体が狭く、重機での表土剥ぎができなかった。２区から５区では、東側が高い旧地形を耕地整理で削っており、表土を剥ぐと厚さ平均50cmの耕作土直下に黄褐色粘質の地山が露出した。

２　調査経過

上原地区の発掘調査は平成12年４月18日、重機による表土剥ぎの作業から開始した。水田の畦をそのまま利用した調査区の設定を行い、同24日からは表土を剥ぎ終えた調査区に関しては人力による清掃を開始した。表土剥ぎと清掃の結果、各調査区とも西側には遺構や遺物包含層が残るが、一方東側は耕作や耕地整理で削られ、上原５区など場合によっては地山まで削られていることがわかった。遺構と確認できたものから順次掘り下げ、遺物取り上げ、実測、撮影等を行い、８月まで調査を実施した。

上原地区基本土層（第３図）

Ⅰ層－現在の耕作土。ビニール類を含む。最近の耕地整理で動かされた客土である。調査区によっては、１ｍ近くの堆積が認められた。

Ⅱ層－耕地整理前の耕作土。茶褐色土層で、白色や黄色の粒子を多く含む。中世以降の陶磁器などが少量出土する。

Ⅲ層－暗茶褐色土。層厚30～50cm。弥生土器が出土する。２・４・５区はこの層まで削平を受けていた。

Ⅳ層－明黄褐色土。アカホヤ二次堆積土と見られる。縄文時代晩期の土器が出土する。

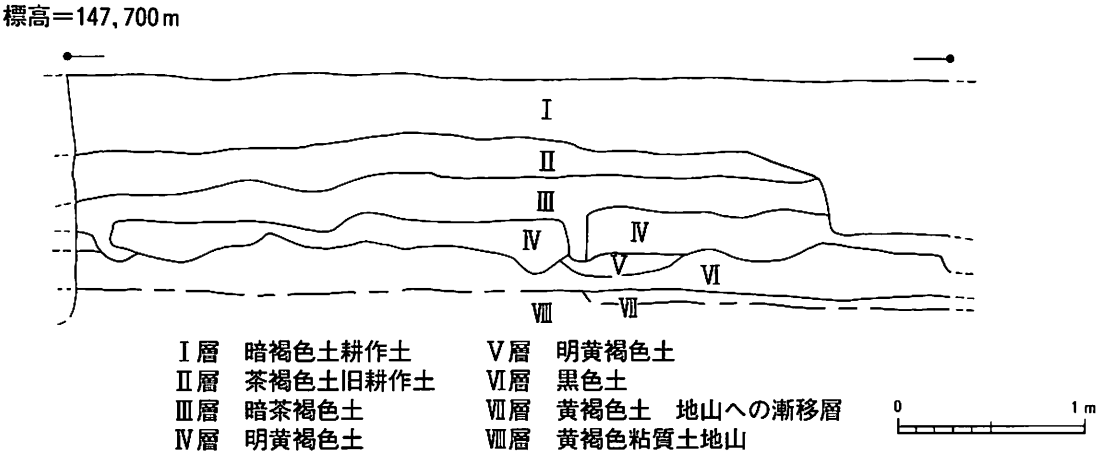
Ⅴ層－Ⅳ層の明黄褐色土とⅤ層の黒色土がブロック状に入る。部分的な層と見られる。

Ⅵ層－黒色土層。上原４・５区西側では層中に灰色の硬い土塊が見られた。

Ⅶ層－黄褐色土。地山のⅧ層に色調は近いが、粘性が弱く、分層が可能である。

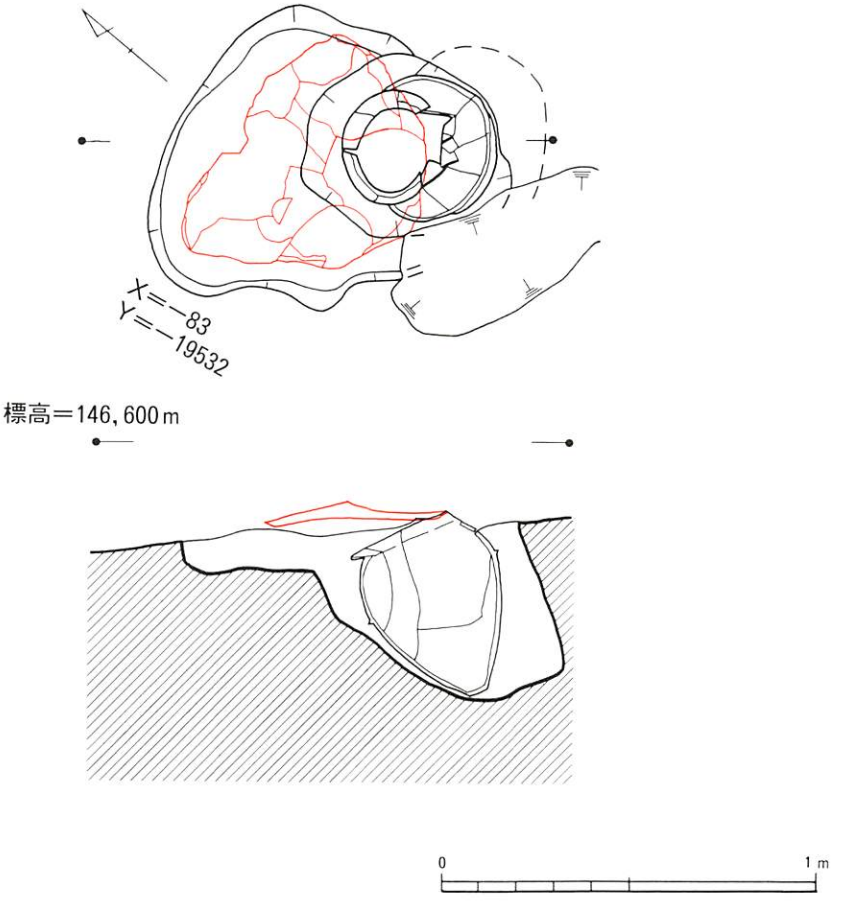
Ⅷ層－黄褐色粘質土の地山。下層では赤味が強くなる。

第３図の基本土層は、耕地整理以前の畑の畦に当たる部分で、ほとんど削平を受けていない個所であり、調査地区内のほとんどはⅠ層が厚く、Ⅱ及びⅢ層が確認できない堆積状況であった。



第３図　上原地区基本土層図

第Ⅱ章　調査の成果



第４図　１号甕棺実測図

第１節　弥生時代の遺構と遺物

１　甕棺

１号甕棺（第４図）

１号甕棺は２区の北側東壁の拡張区で見つかった。調査区として設定していた断面に凝灰岩が露出しており、ピンポールを壁に刺してみると、ある程度の大きさがあり、ほぼ水平に位置していることがわかった。石材からも礎石建物に使われた礎石の可能性があったため、調査区の壁を幅約1.5メートル、東側へ約１メートル拡張した。凝灰岩に近いレベルまで掘ると石の南東に弥生甕形土器の口縁部破片が数点見られ、この時点で石周辺の精査を行ったところ、暗褐色土の掘り込みがあり、凝灰岩製の蓋を持つ甕棺であると確認した。

蓋として使われた凝灰岩は長軸72㎝、短軸53㎝、厚さ６㎝で、角が丸い三角形に整形してあり、下面はくぼみ、上面には打ち欠いた痕跡が残る。

甕は10㎝ほどの掘り込みの南西側をさらに深く掘りこみ、口縁を北西に向け、約60度の角度で埋められていた。

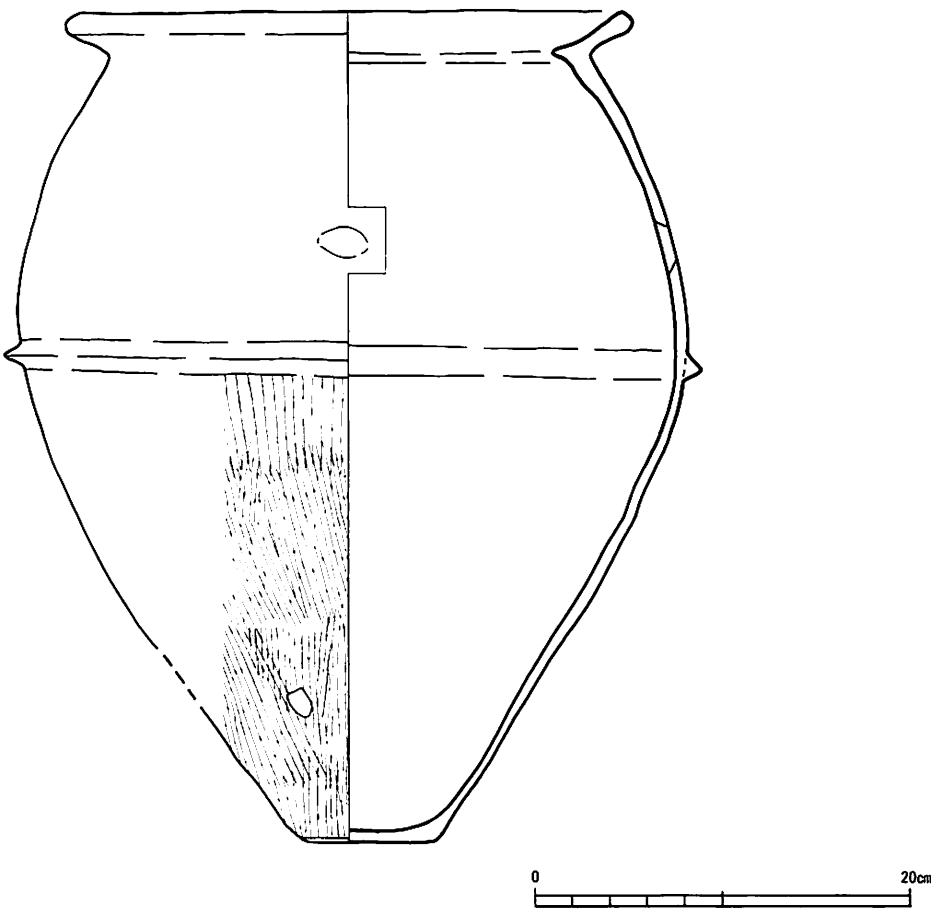
蓋石を除去後、甕内部の掘り下げを行い、掘りあげた土はふるいにかけ、水洗いを実施した。甕棺の小片と少量の炭以外に人骨や副葬品は検出できなかった。

調査区周辺ではこの甕棺の他に複数の甕棺が発見・報告されている。

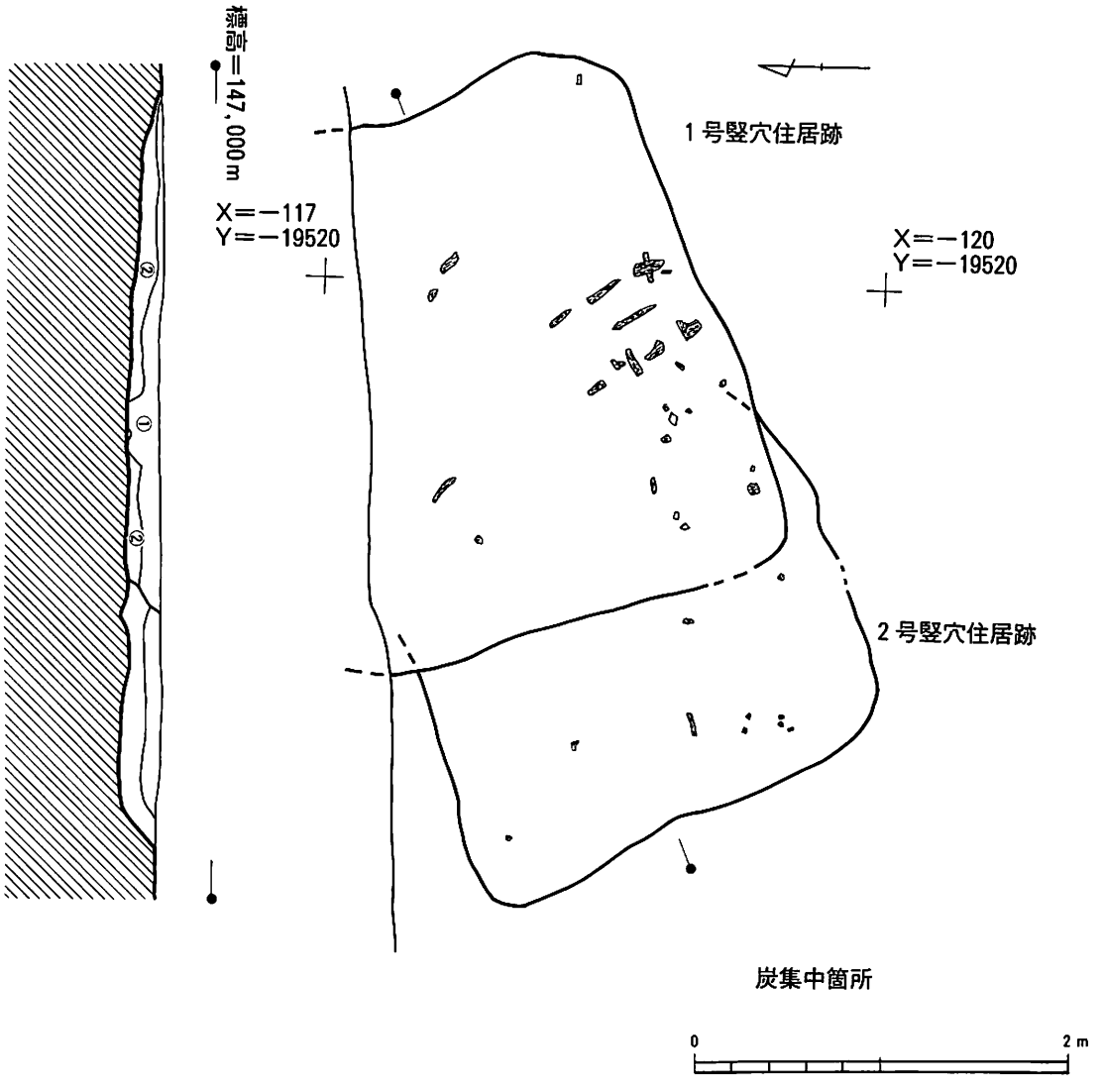
遺物（第５図）

甕は高さ44cmの弥生中期黒髪式土器である。体部中央付近に突帯を一条巡らしていて、突帯直上に体部最大径がくる。底径7.5cmの平底で、底部から体部上半までは器壁が薄く作られている。外器面の突帯より上ではハケ目を丁寧にナデ消すが、突帯より下ではハケ目が残る程度のナデで仕上げている。内器面は全面に丁寧なナデ調整を施す。

孔は体部上位と底部近くに間隔を置いて２つ開けられ、どちらも外面から内面への穿孔がなされている。



第５図　出土甕棺実測図



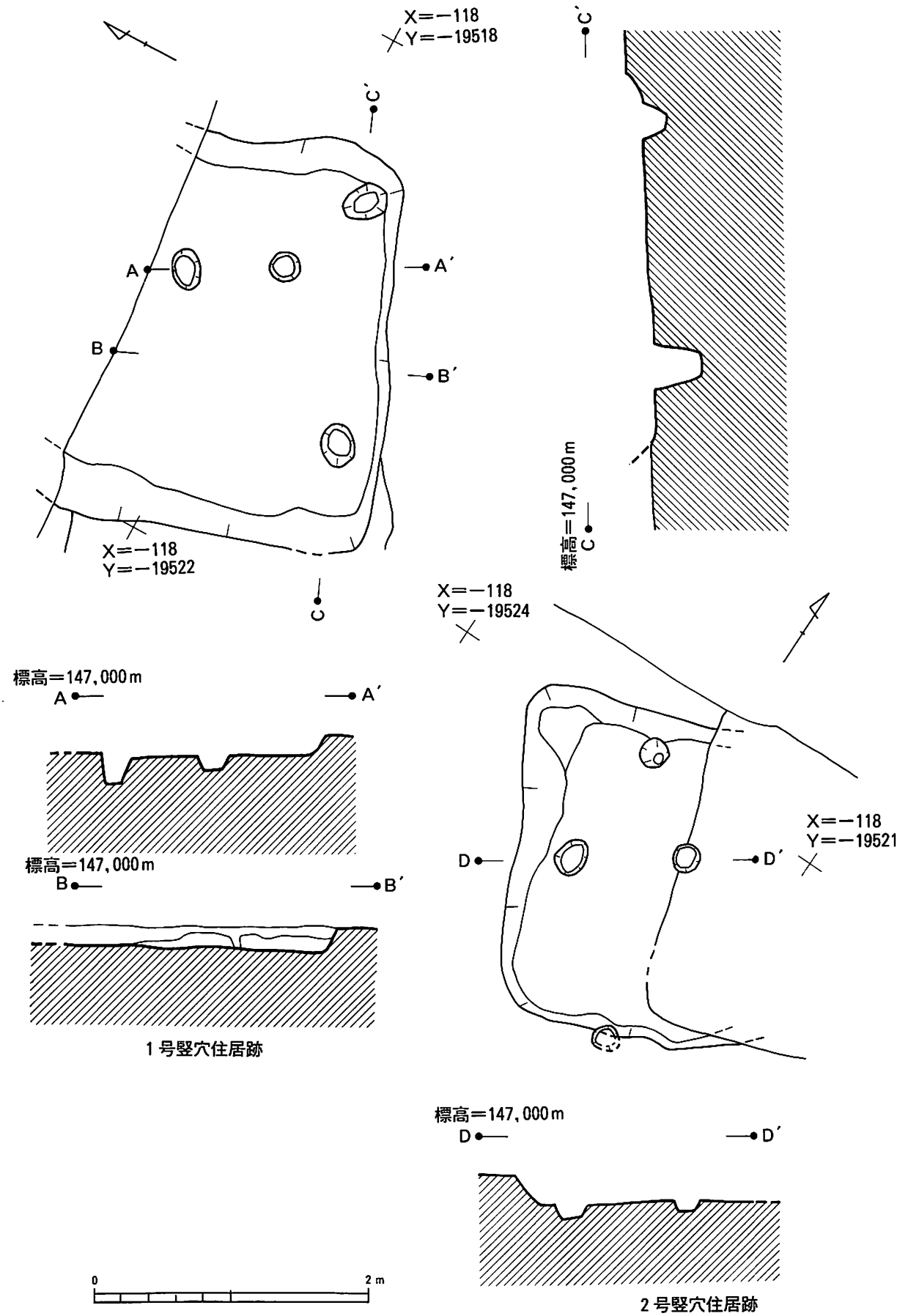
第6図　1号・2号竪穴住居跡実測図(1)

2　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第6・7図）

4区の北西隅で、竪穴住居跡が2棟検出された。試掘の段階でもこの場所には炭の集中と土の色の違う部分が認められた。表土を剥いだあと、精査したところ、切り合った2棟分のラインを確認した。検出面での炭の出土状況を第6図に示した。この面から掘り下げてみたが、下部へ落ち込んでいる細かい材は混ざるが、床面に近い深さではほとんど見られなくなった。切り合いを見るためトレンチを開けたところ、「2号→1号」の前後関係が判明した。

1号住居跡は水田の畦のため、全掘していない。大きさは3.0m×2.3m以上の大きさで、方形または長方形のプランと見られる。床面は黄褐色粘質土（地山）で硬化している部分は見られなかった。炭が大量に出土している。ただし、これは検出面での広がりで、床面や床面近くからの炭の出土ははほとんどなかった。床面までの深さは20cmで、覆土は2つに分層した。①層は黒褐色土で、特に上層で大量の炭が含まれる。この炭は取り上げる際にボロボロ崩れていくような、保存状態の良くない炭であった。②層は暗黄褐色土層で粘性があり、炭を少量含んでいる。地山の黄褐色粘質土層がブロック状に入っている。



第7図　1号・2号竪穴住居跡実測図(2)

第６図で見ると、炭は南壁際中央で多く確認されており、これから北へ点々と続く炭はあたかも２本の垂木のような住居の構造材が焼け、内側へ倒れ込んでいるようにも見える。しかし、床面との間に①層下部と炭があまり入らない②層が存在することから、火災で焼け落ちた状況は考えられない。

１号住居跡に伴うと見られる柱穴を南西と南東の隅に各１基、他に２基確認している。
また、覆土①層から弥生時代後期と見られる土器数点が出土しているが、図化できるほどの資料はなかった。

２号竪穴住居跡（第６・７図）

２号住居跡は東側を１号住居跡に切られているが、現存している範囲を計測すると、2.4ｍ×1.5ｍ以上で方形あるいは長方形のプランを推定できる。検出面で炭の広がりが認められ、第６図作成後掘り進めたが、覆土中の炭は少量にとどまった。床面は切り合っている１号住居跡と同様、黄褐色粘質の地山で、硬化している面は確認できなかった。床までの深さはほぼ同じであるが、２号住居跡の床面には７cmほどの高低差がある。柱穴が西側壁中央と北壁際に１基ずつ確認できた。中央にも柱穴が１基あるが、炭などの出土はなかった。

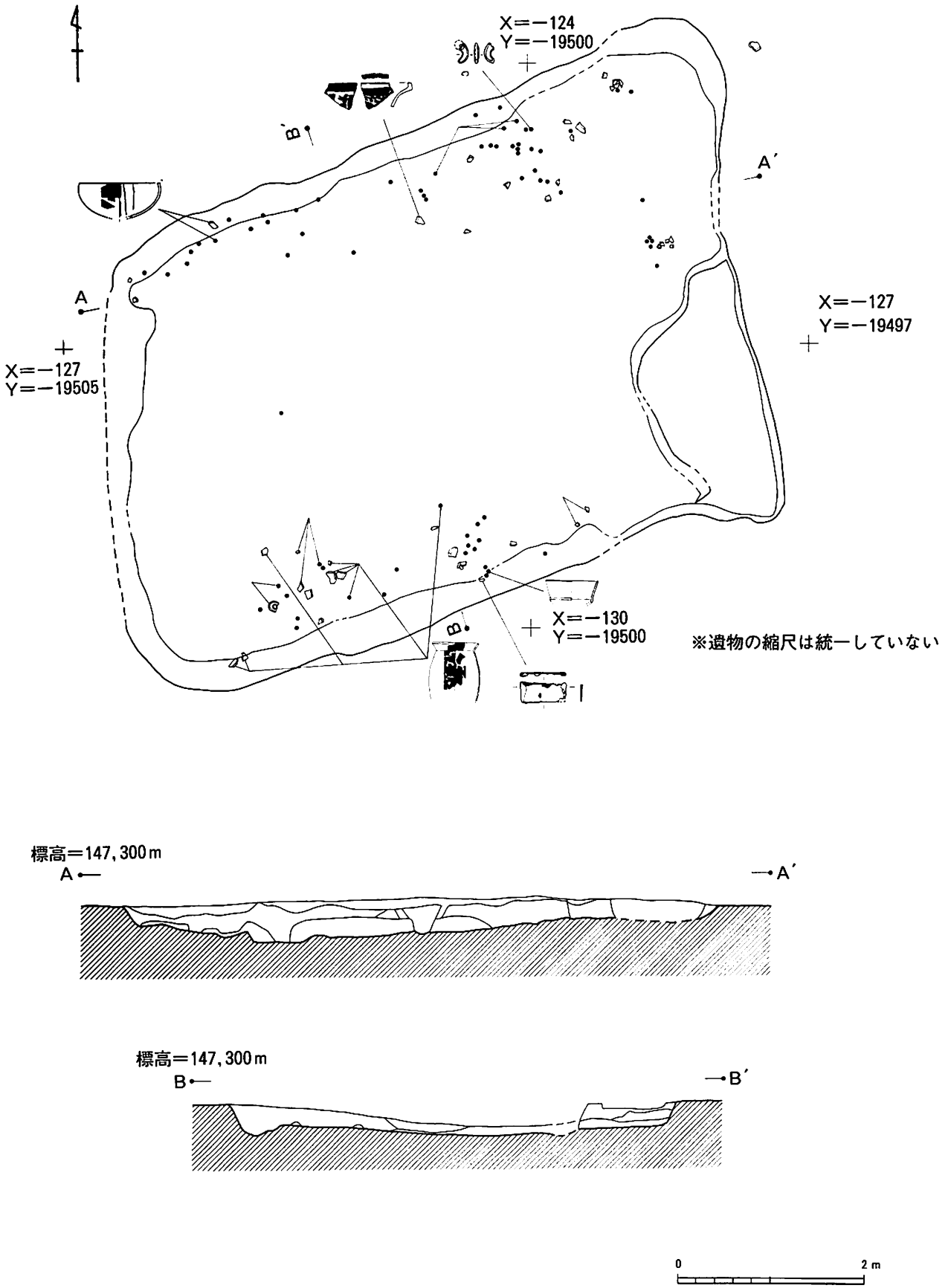
２号住居跡からは炭以外の遺物は出土していない。

３号竪穴住居跡

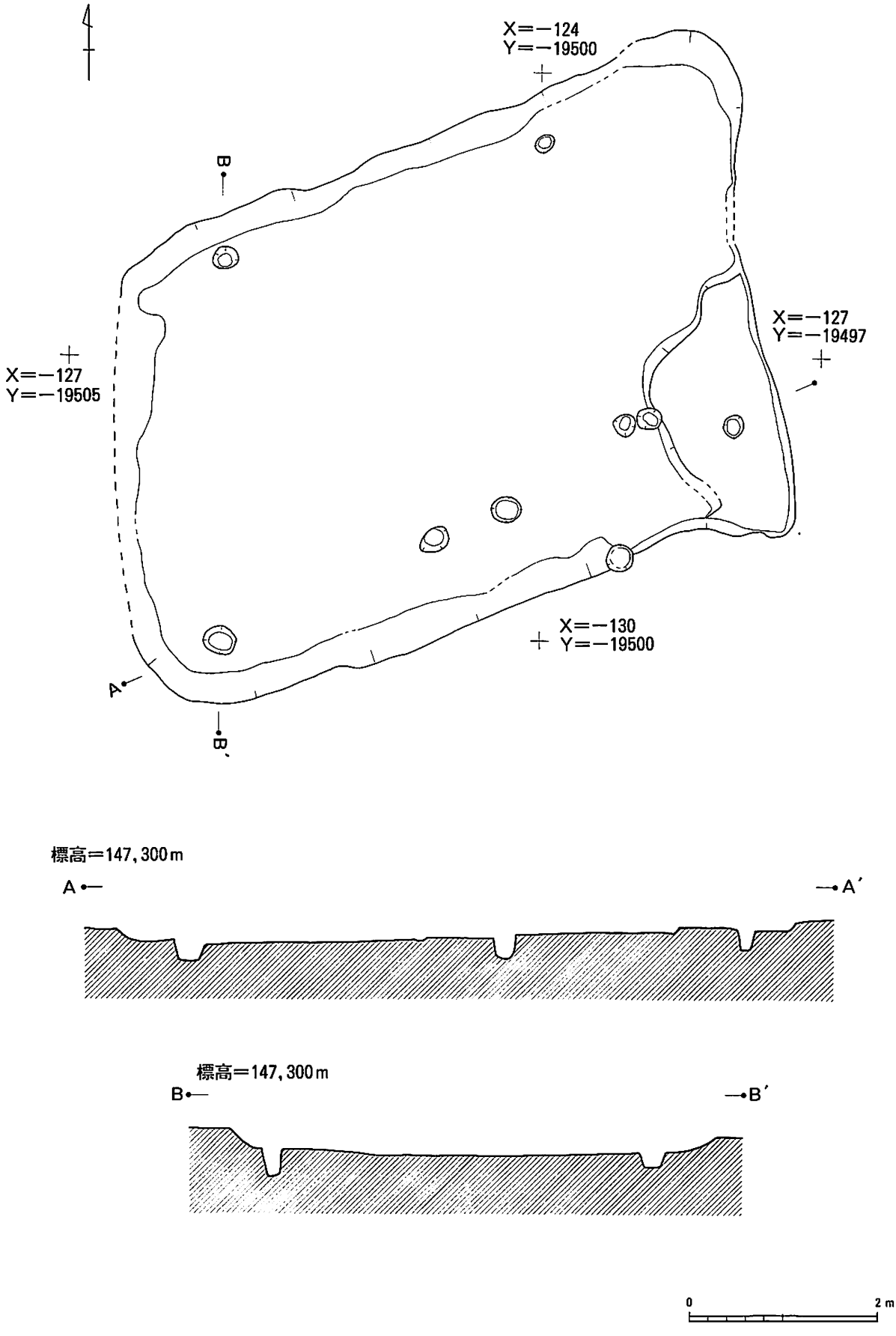
・遺構（第８・９図）

上原４区の中央付近にあり、今回の調査で確認した住居跡では7.0ｍ×5.0ｍと最も規模が大きく、また多数の土器が出土している。しかし、検出した時点で住居跡を東西方向にえぐるように攪乱が入っており、深いところでは床面より下まで入っていた。特に東西壁と中央は遺物が周辺と比べて極端に少ない状態であった（第８図)。この為、東西方向の断面図は覆土が残っていた箇所で作成している。また、南北の壁際で柱穴を検出した。南壁際の４基はほぼ一直線上に並ぶような配置である。南東隅には2.4ｍ×1.3ｍのわずかな高まりがつけられ、住居への出入り口やあるいはベッド状遺構などの施設の一部とも考えられるが、硬化している面がない、１カ所だけでの検出であることなどから、高まりの用途や機能について特定できなかった。

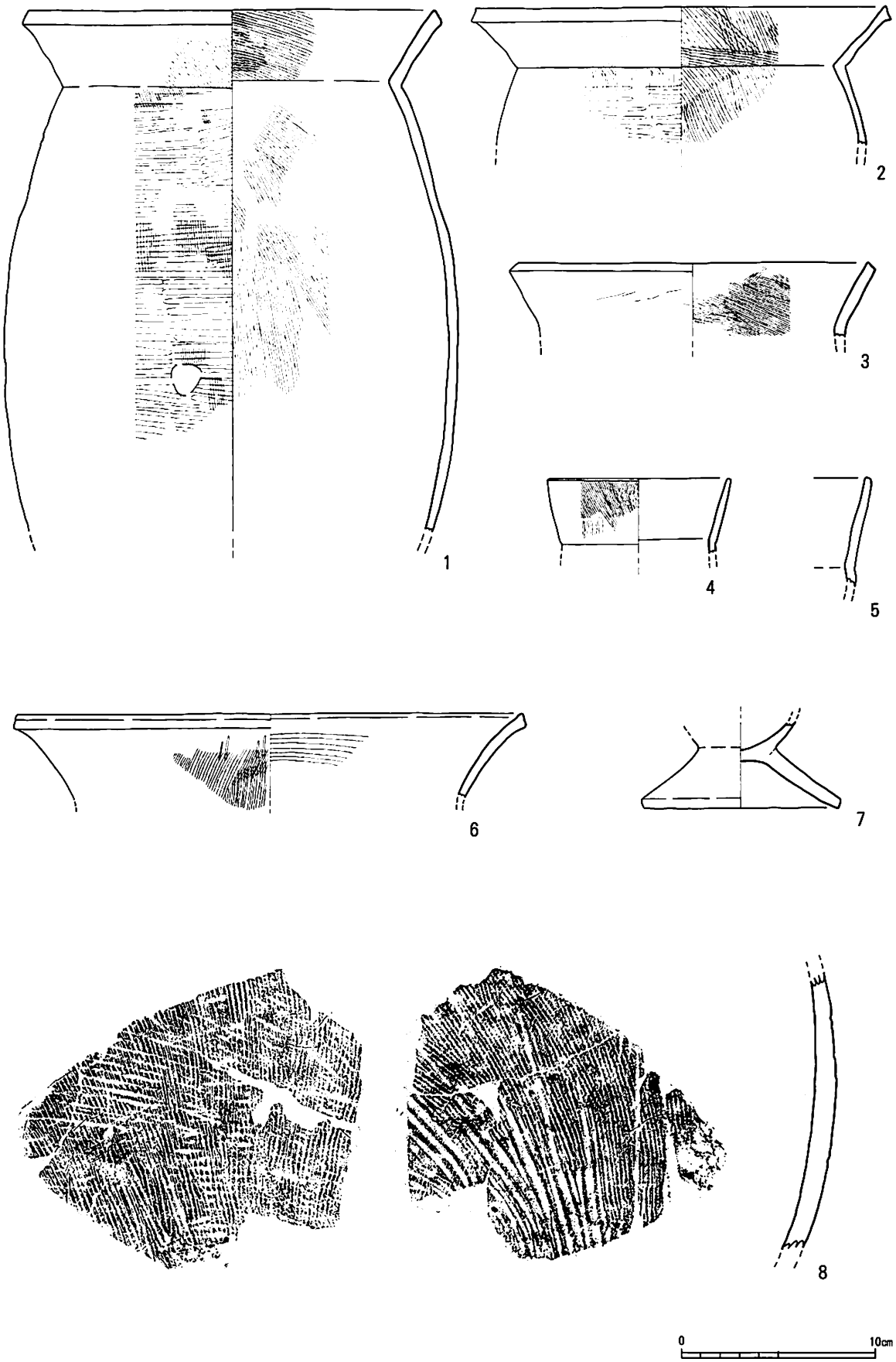
３号竪穴住居跡の時期については、床面からの遺物出土はなかった。ただし、覆土から多数の土器片の出土があり、それらが互いに接合する状況が見られた。しかもこれらの土器は弥生後期末頃に比定できることなどから、住居跡自体の年代もこの時期であると考えられる。



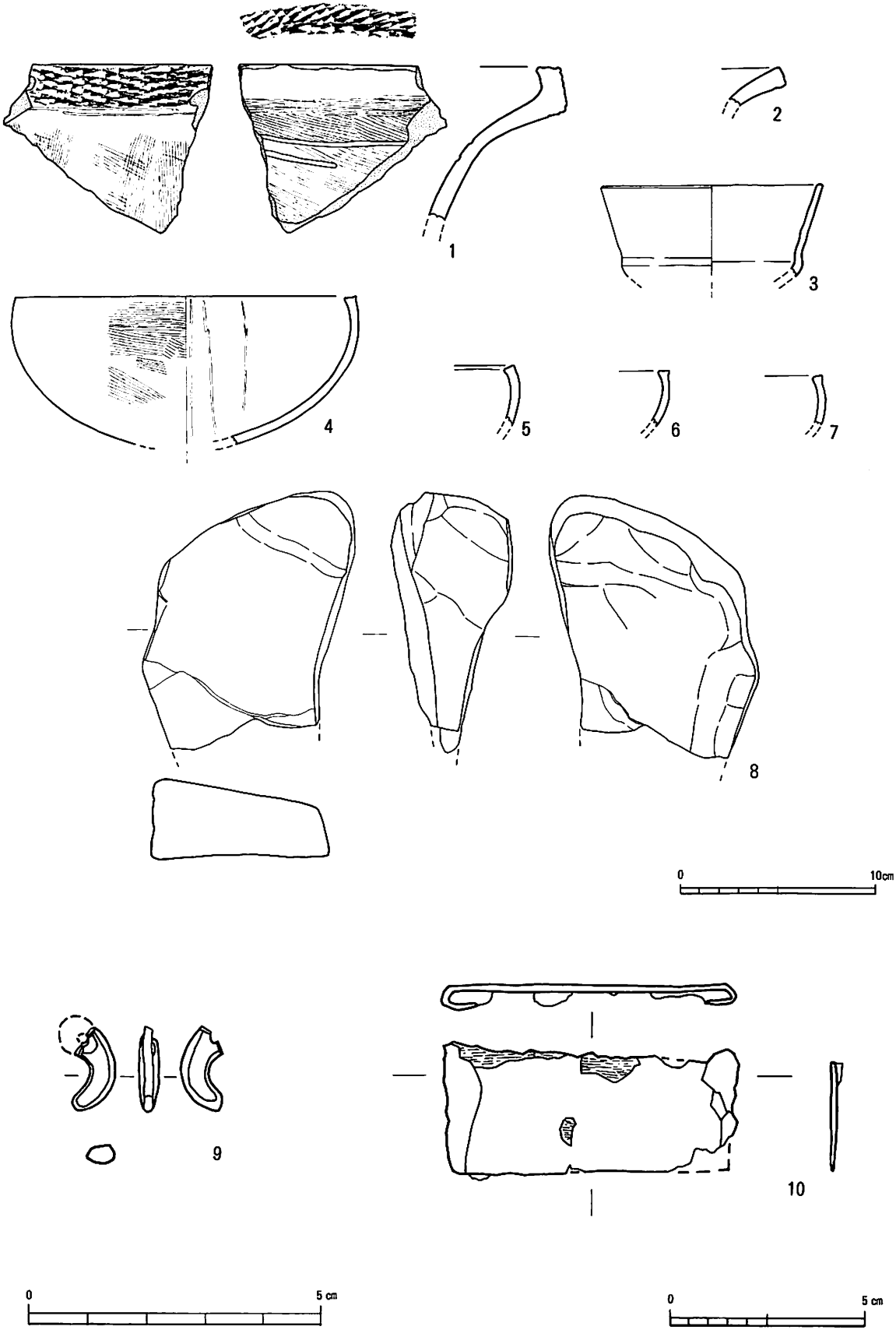
第8図　3号竪穴住居跡遺物出土状況・断面図



第9図　3号竪穴住居跡実測図



第10図　3号竪穴住居跡出土土器実測図



第11図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図

・遺物（第10・11図）

第10図１は口縁部から体部下位までが復元できたもので、器形や調整がよくうかがえる資料である。口縁部が「く」の字に屈曲し、体部はあまり張らない長胴の器形で、体部最大径が中位にくるが、口径より若干大きい。外器面の調整は口縁部から頸部を斜め方向のハケで、頸部以下体部中位までは縦方向のハケ目の後にタタキを密に施すが、体部下位では縦方向ハケ目のみでタタキは見られない。２は外面の調整は１と同様だが、内面にはしっかりしたハケ目を残している。

３～５は頸部の屈曲が弱い甕で、１・２より器壁が薄く、口径が小さい小型の甕である。３は復元口径が18.8cmで、外器面はよくなでられているが内器面にはハケ目が残る。４は口縁の立ち上がりがほぼ直立する器形で、外器面にハケ目が残る。５は小破片のため口径は復元できなかった。６は口縁部のみの出土で甕形としているが、壺形の可能性もある。内面に横方向の粗いハケ目状の調整を行っている。７は甕脚部で断面が「八」の字形に開く。３号住居跡での土器底部は７のみであった。８は周辺からの出土土器と接合できた資料で、大型の甕あるいは壺の底部に近い部分と見られる。器壁が厚く、内面に縦方向ハケ目のほか、粗く篦で削ったような調整がある。第11図１～３は壺形土器である。１は直立した複合口縁の形態を持ち、口唇と口縁の端部外面に半截竹管文をびっしりと施す。胎土に少量の金雲母を含み、内外器面にはハケ目の痕が残る。２は口縁部の少破片で、口唇が僅かに膨らむ。３は小型丸底壺である。口縁が開き気味に立ち上がる器形で、胎土に黒雲母を多く含む。４～７は鉢形土器で、甕・壺形土器と比べるとナデ調整などで丁寧に器面を仕上げている。４は底部近くまでがわかるもので、復元口径は17,4cm、外面はハケ目を残すが、内面は丁寧なナデ調整の後で、２cmほどの間隔で縦方向に浅い沈線が入れられている。５～７も４と同様の鉢形土器口縁部だが、小さな破片だったため、口径などは復元できていない。８は砂岩製の砥石で、一部破損しているが、かなり使われ、中央部は薄くなっている。９はピットより出土した勾玉で、頭部が欠損している。頭部の孔から数カ所の切れ込みが両面に見られ、この切れ込みから欠けている。10は鉄製の鋤先で、基部に木質が残る。

４号竪穴住居跡

・遺構（第12図）

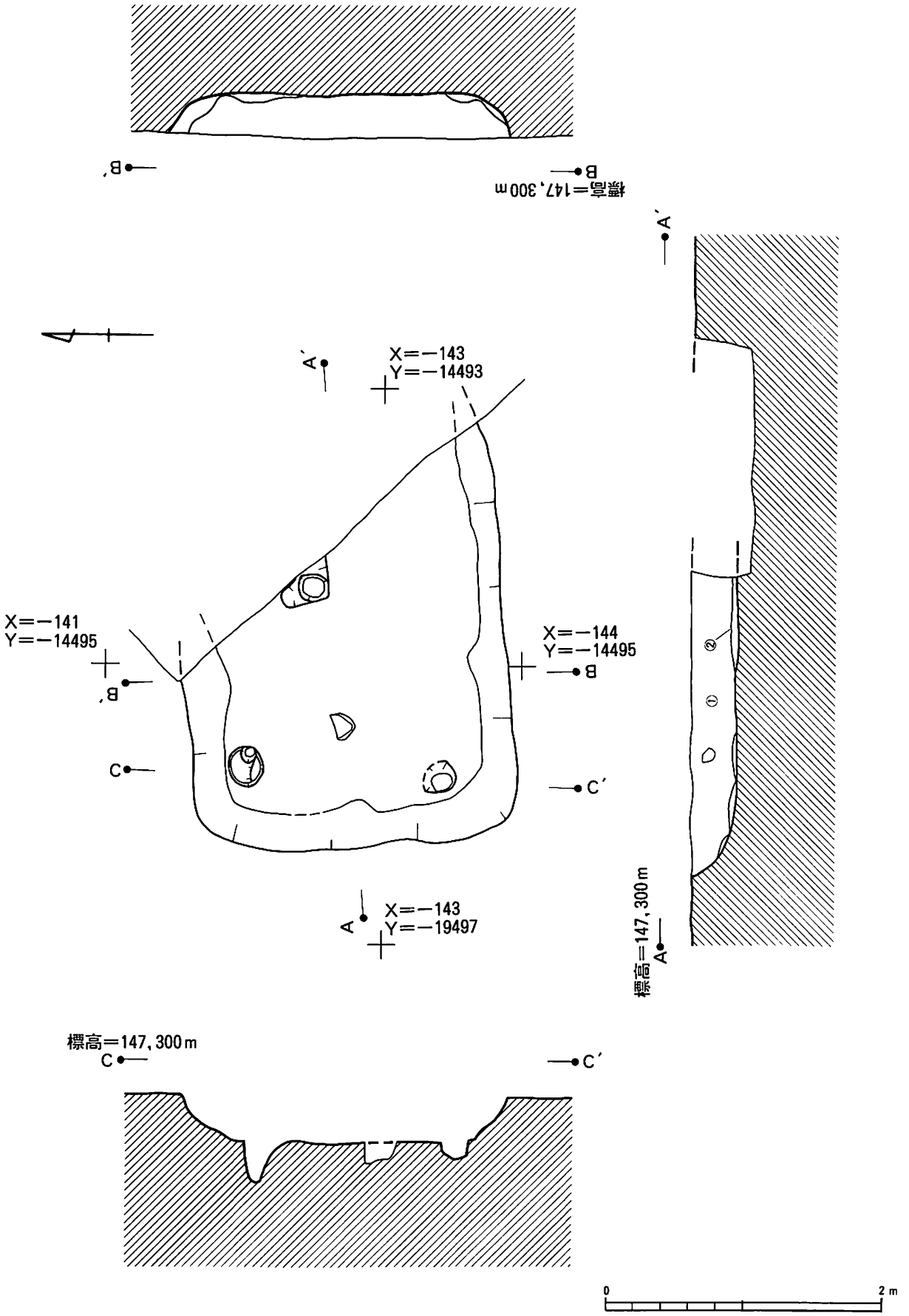
４号住居跡は５区の北東部で検出した。西から東へ緩やかに高まる旧地形の、平らな部分にあったもので、東側はトレンチ調査の際削られている。トレンチ掘りの東側を精査したが、続きは見つからなかった。削られた部分をのぞく大きさは2.34ｍ×2.86ｍ以上の、長方形プランが考えられる。

住居の中央にピットを検出したが、炭や焼土などの炉と考えられるような遺物は出土しなかった。覆土は、床面直上に薄く堆積した暗黄褐色土層（②層）と、きめ細かく明るい灰褐色土層（①層）の２層であった。①層は少量の遺物と下位に青灰色の土塊をわずかに含む、ほぼ単一の層で、覆土のほとんどを占める。石皿は第14図のＡ－Ａ’断面にもあるように、床面からはかなり浮いた状態での出土であった。

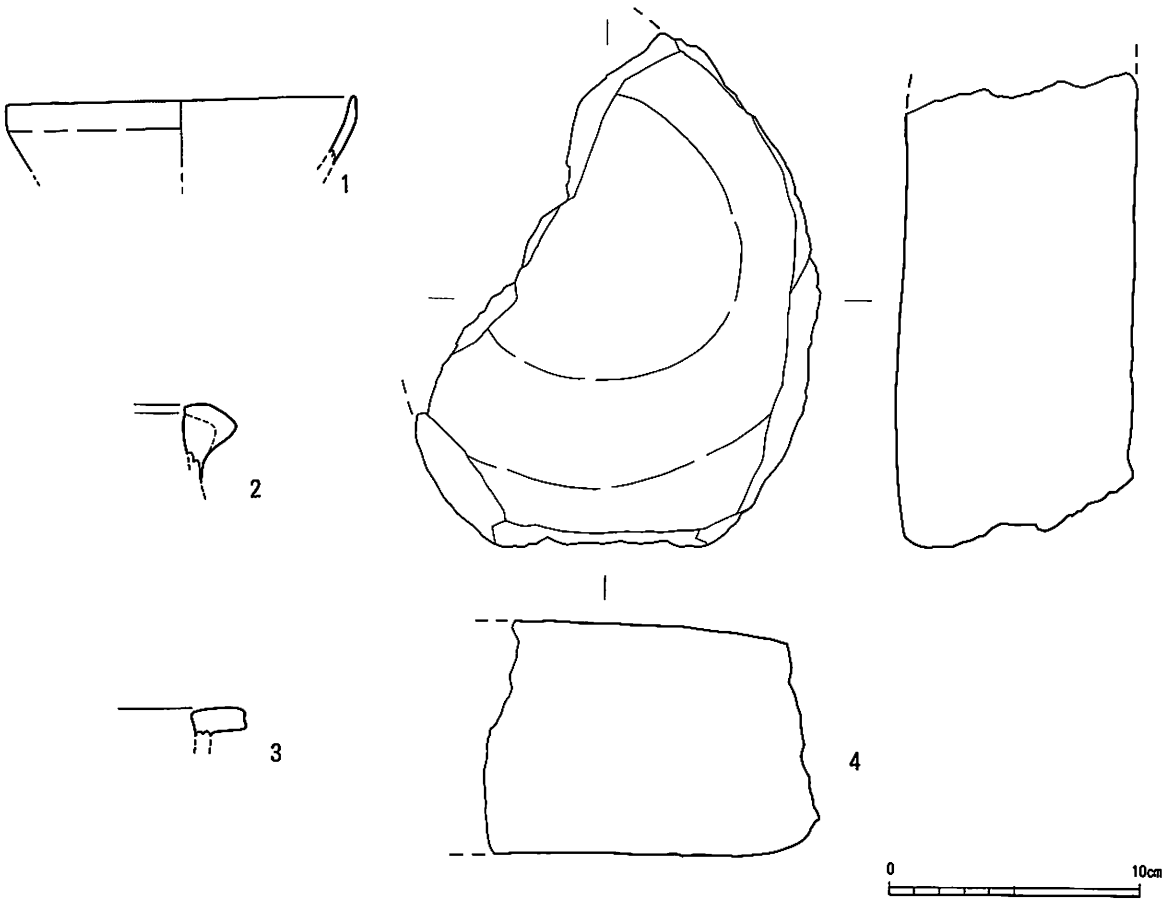
４号住居跡の時期については、覆土から弥生時代中期と見られる土器が少量出土している。しかも、後期の土器は出土しておらず、１・３号住居跡に見られるような、出土土器が弥生後期で占められる出土状況とは大きく違っている。また、上原２区付近のように地点を違えて弥生中期の甕棺も複数の出土が確認されており、この時期と同じと考えても差し支えないであろう。

・遺物（第13図）

４号竪穴住居跡の覆土中より出土した遺物を第13図に示した。１は高坏の口縁部で、口唇付近はつまむように整形しており、外器面に稜線がある。また、内外面に赤色顔料を塗布している。口径を復元したところ、14cmであった。２・３は甕形土器口縁部で、２は内面のハケ目をなで消し、３は口縁端部を平坦に整形し、刻み目を入れている。４は石皿で、中央付近がよく研磨されている。



第12図　4号竪穴住居跡実測図



第13図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図

第２節　その他の遺構と遺物

１号掘立柱建物跡（第14図）

上原５区で２間２間の掘立柱建物跡を検出した。北隅の柱穴は試掘トレンチで削られてしまったので不明である。また、部分的に深掘りにかかり、掘り下げている箇所もある。計測値は長軸（桁）方向が5.64ｍ、柱間が北側から3.14ｍと2.5ｍ、短軸（梁）方向が4.6ｍで柱間が東から2.3ｍの等間である。

柱穴の深さは25㎝～67㎝であった。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

１号土坑（第15図）

上原２区の北端、甕棺墓のすぐ西側で１号土坑を検出した。また、この２区北側には甕棺や１号土坑のほか、２～５号土坑まで、まとまって検出されている。形状は不整の方形に近く、大きさは1.66ｍ×1.23ｍ、深さ63㎝である。覆土は灰褐色土で赤や黄色の砂粒を含む①層と、暗褐色土で黄色粒を含む②層がある。覆土①層は薄く、②層は約57㎝と厚い。掘り込みのほとんどは②層の堆積で、加えてこの層には黄色粒以外に目立った混入物も見られず均質な土であり、一気に埋まったような堆積の状況を呈している。隣接して甕棺墓が存在していることから、甕棺と同じ、弥生中期頃の土壙であった可能性がある。

１号土坑から遺物は出土していない。

２号土坑（第15図）

２号土坑も上原２区北側で検出した。平面はほぼ円形を呈し、直径約１ｍである。ただし検出面からの深さが６～10㎝と、周辺で検出されたほかの土坑と比べるとかなり浅い。床面には若干の締まりがあった。中央と西側には土坑と重なるような円形の黒色土を検出した。西側の黒色土を掘り下げると壁面に凹凸があり、覆土の黒色土も軟らかい粘質土であったので、樹痕と考えられる。中央のピットにも暗褐色の土坑覆土とは混入物の点で違う土が堆積していたため、土坑本体とは異なる時期のピットと見ている。

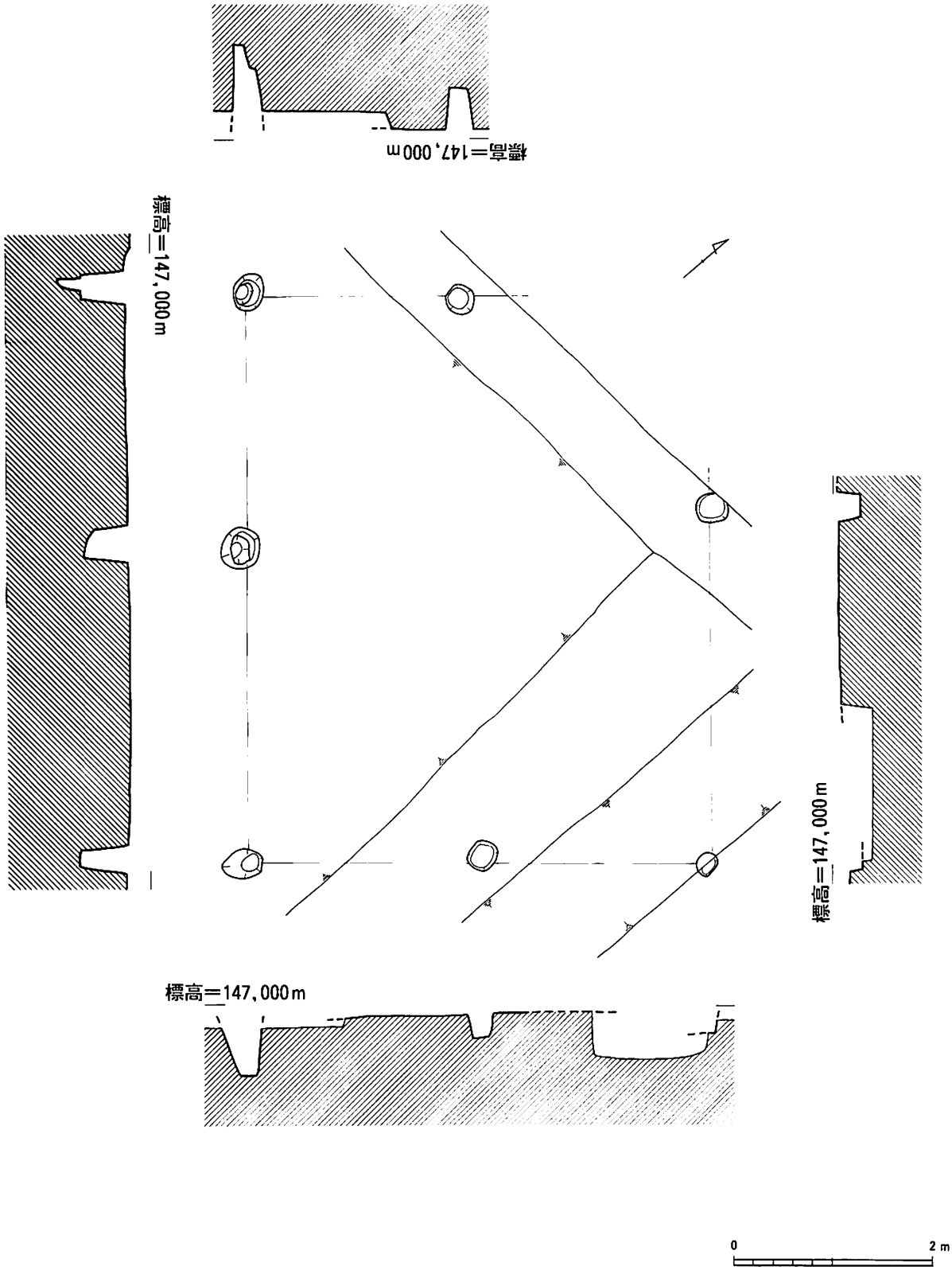
２号土坑から遺物は出土しておらず、時期を決定することはできなかった。

３号土坑（第15図）

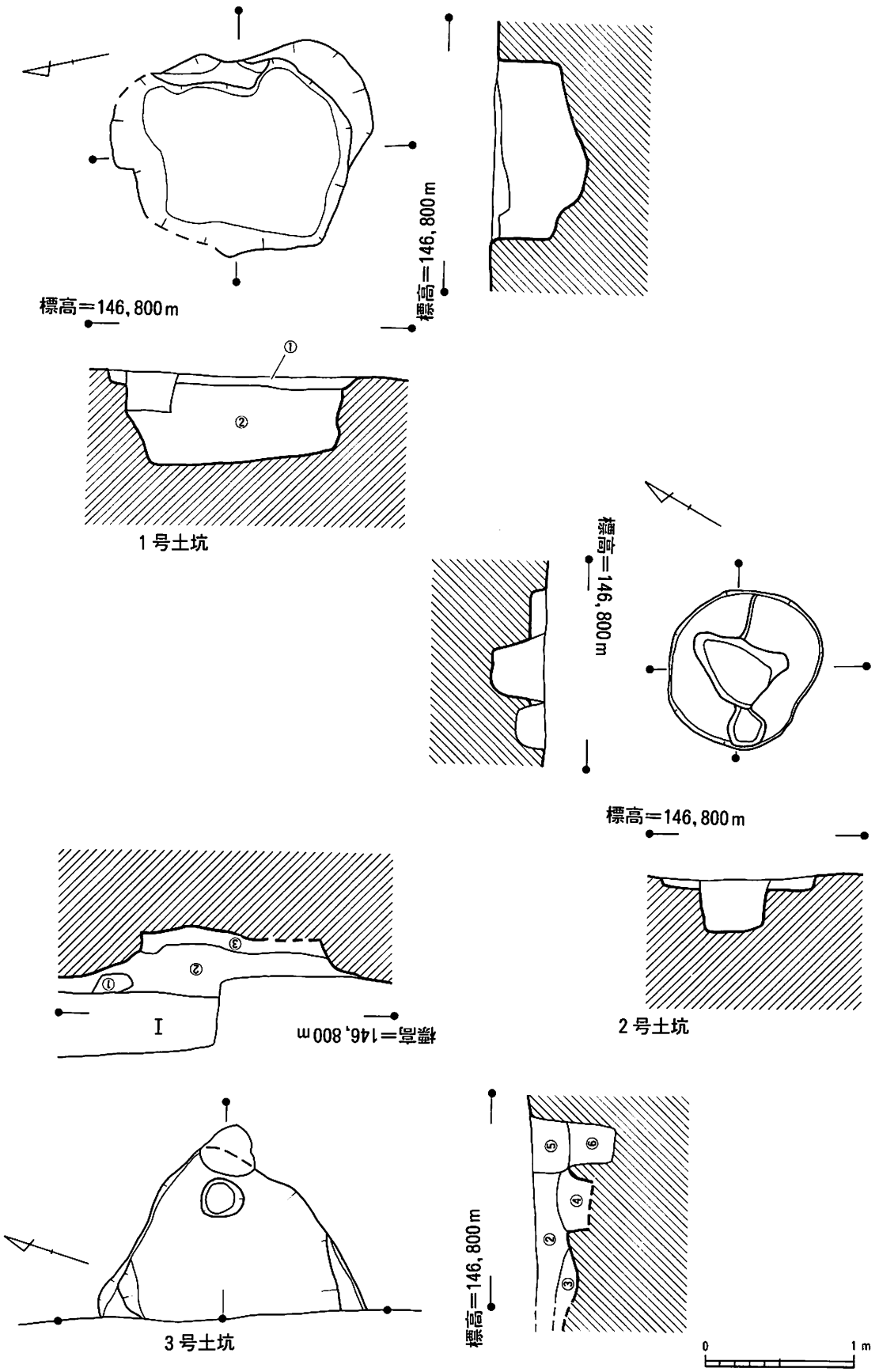
３号土坑は調査区外まで掘り込みが広がっており、全くつはできなかったので、大きさは示せないが、計測すると東西に1.2ｍ、南北方向に1.8ｍが残存していた。全体はこれより大きな規模であったと考えられる。床面は硬化しておらず、また覆土④層には黄褐色土が混ざっていたため、南側の床面確認の際、少し削ってしまった。

覆土②層で第１７図の土器口縁部が出土している。一応土坑の覆土層出土だが、東壁に近い場所で、この部分には樹根が入りこんでいるため、樹根に伴う落ち込みの遺物かもしれない。

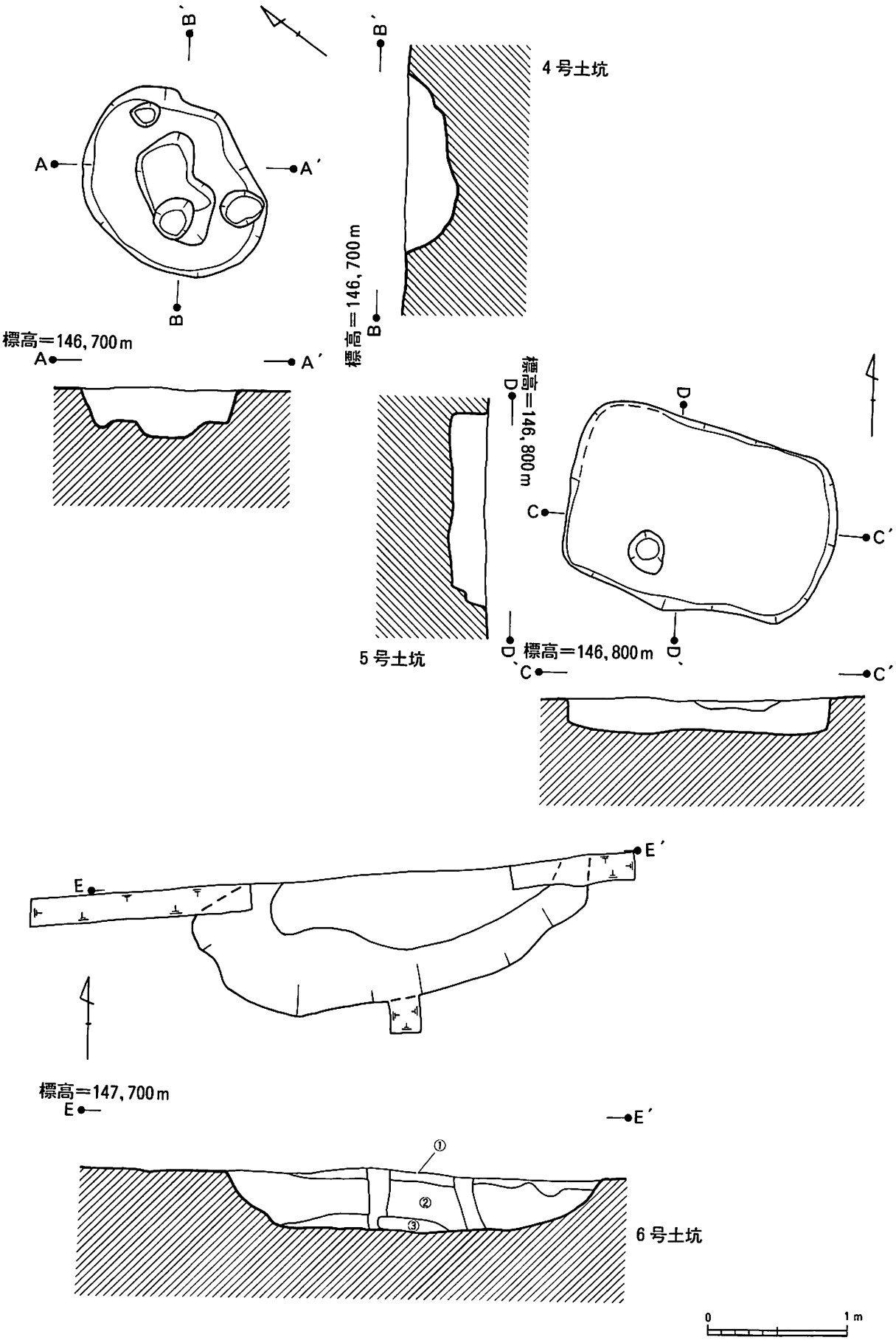
第17図は壺形土器の口縁部で、３号土坑から出土した。中破片２つが出土し、うち１つには外器面の口縁直下に２種類の線刻を確認した。２つとも土器の破損によって全形はうかがうことができない。１つは先端の尖った工具で細い線で描かれた図で、曲線で突起部分を造り出しており、ちょうど魚の尾鰭のような形をしている。またもう１つの図も土器の割れで全体像は不明だが、並行する２本の線がつながる図の一部である。復元口径は22.6㎝で、口縁内側に突起を貼りつけており、口唇は平坦ではないものの、幅広い作りになっている。



第14図　1号掘立柱建物跡実測図


標高＝146,800m
標高＝146,800m
①
②
1号土坑
標高＝146,800m
標高＝146,800m
2号土坑
③
②
①
I
標高＝146,800m
⑤
⑥
④
②
③
標高＝146,800m
3号土坑
0
1m

第15図　土坑実測図(1)


4号土坑
標高=146,700m
A
A′
B
B′
5号土坑
標高=146,800m
C
C′
D
D′
標高=147,700m
E
E′
6号土坑
①
②
③
0
1m

第16図　土坑実測図(2)

4号土坑（第16図）

4号土坑は1.37m×1.22m、深さ37cmの楕円形状の土坑で、中央に浅い段を設けている。覆土は赤味のある暗褐色土で、部分的に黄褐色土や灰色土がブロック状にはいるが、分層できなかった。土器などの遺物は出土していない。

掘り込みの深さや底面の形態に違いはあるが、1号土坑と同じく、土壙の可能性がある。

5号土坑（第16図）

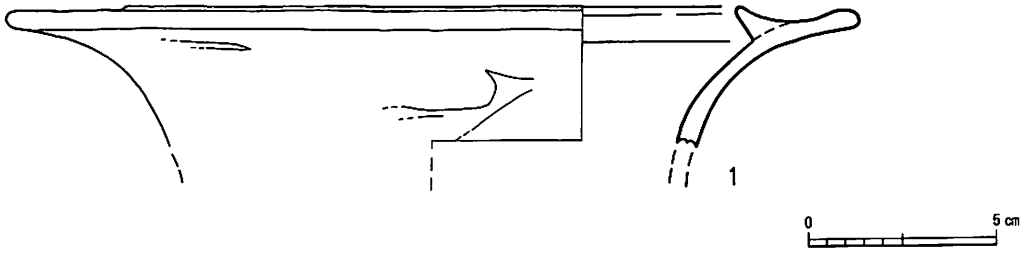
東西方向に1.94m、南北方向1.30mの大きさを持つ、方形プランの土坑で、深さ65cmである。覆土は2層に分層できた。覆土①層は黒色土で、薄い。②層は暗褐色土で、黄色や灰色の土の塊を多く含む。土には締まりがなく軟らかい。遺物の出土はなかった。

5号土坑についても、プランは方形であり、前述の1号甕棺などに近い場所にあることや、締まりはないものの一度に埋められたような堆積であることなど、土壙としての可能性が高い遺構である。

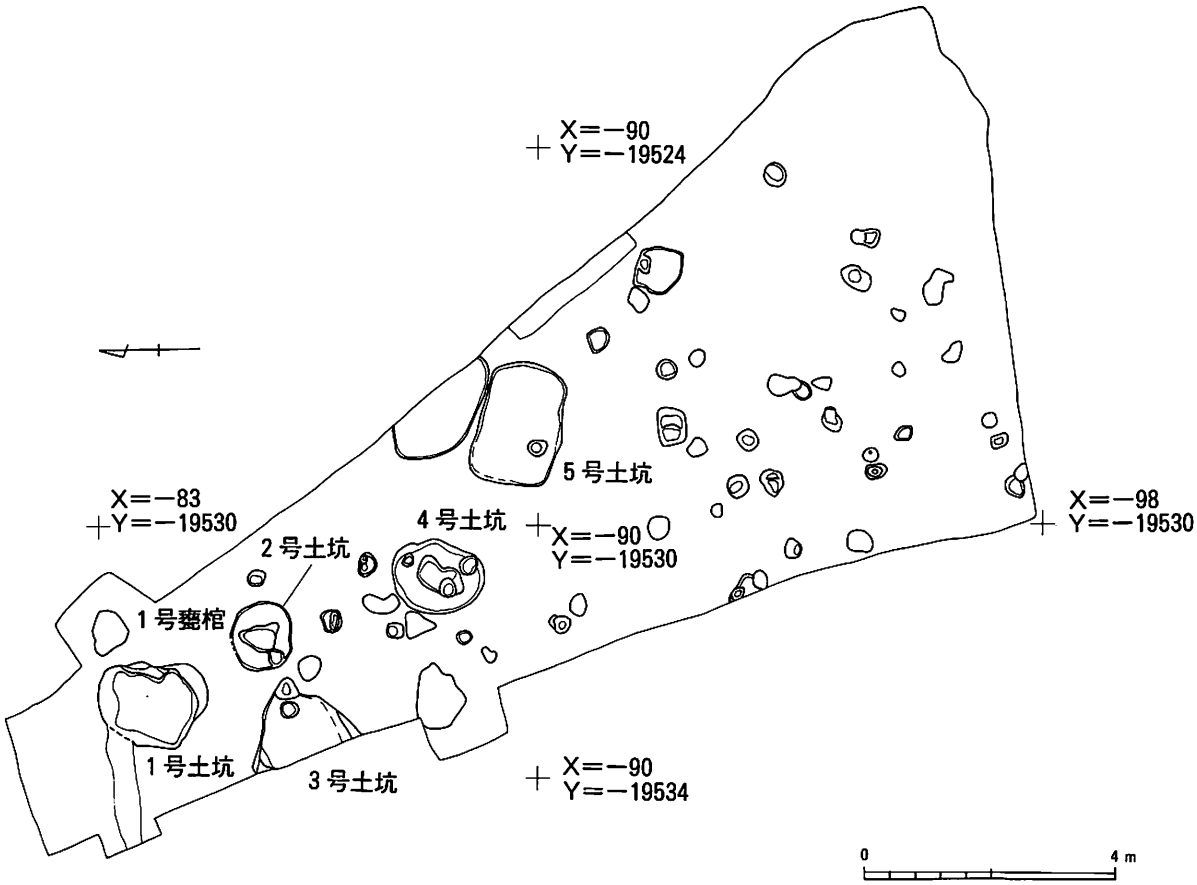
6号土坑（第16図）

6号土坑は4区の南端中央付近にあり、畦のため全掘できていない。東西に2.84m、南北に0.86mの範囲を掘り下げた。覆土は3層に分けることが出来た。①層は黒色土でさらさらしている。黒色土の②層は厚く、遺構覆土の大半を占め、一部は底面に直接乗っている。③層は暗褐色土で②層などと同じく軟らかい。

底面に硬化しているような土は見られなかった。



第17図　3号土坑出土遺物実測図

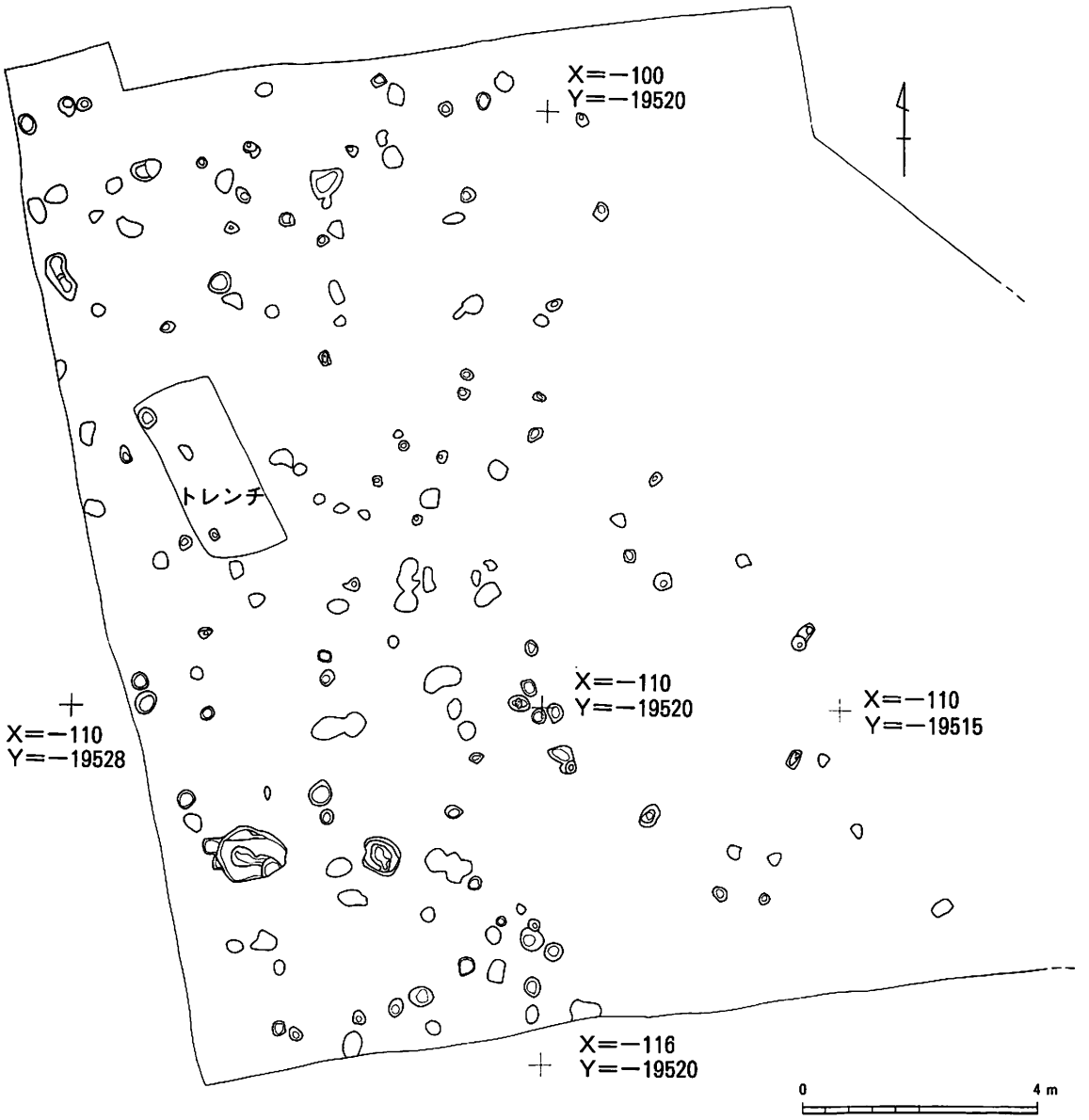


第18図　上原2区遺構実測図

上原2区（第18図）

今回設定した調査区の中では最も小さいが、北側に1号甕棺、5基の土坑が集中している。南側ではピットが多く見つかっている。削平はⅢ層の下位で止まっている。

Ⅲ層掘り下げの際、古代の掘立柱建物跡の柱堀方に似たラインが数個見えたので何度も精査し、柱堀方の検出に努めた。また2区以外に4区や5区でも同様の土の違いが見られたので、丁寧に掘り下げを進めたが、見つけることは出来なかった。



第19図　上原３区遺構実測図

上原３区（第19図）

上原３区の発掘では表土を除去したところ、黄褐色粘質土の地山が出てきた。隣接する２区や５区の表土を除去したレベルとの比較では大した差はないので、３区についてはちょうど地山の上面あたりまで削平が及んでいるものと見られる。

遺構配置図では表現していないが、中央から南側の範囲には攪乱がはいっている。以前ゴボウ畑として耕作されていた区画であり、範囲としては畦を越え、４区まで伸び、畦の高まりで止まる。ゴボウ専用の耕作用機械を使いかなり深くまで掘ってあった。このため、攪乱は地山まで及び、何本も黒色土に赤や黄色・白色土が混じった攪乱土を確認した。

上原４区（第20図）

今回の調査中、最も大きな調査区である。遺構では３つの竪穴住居跡や多数のピットなどの検出があり、また遺物の出土量などでも他の調査区を圧倒する。ただし、遺物は多くが３号竪穴住居跡やその周辺からの出土が多く、遺物包含層からの出土は概して少なかった。

４区の西側は耕地整理以前の畦で削平・攪乱を受けていない箇所があり、この地点で基本土層図（第３図）を作成した。東側は削平によって地山まで削られていた。西側中央には陥没でできた穴があり、これを埋めるため、コンクリートの大きな塊や大量の土が投げ込まれていた。東西方向には農業用の配水管によって幅３０cm、深さ１０～100cmほどの攪乱が入っている。３区から続く、ゴボウの耕作による攪乱もみられる。

上原５区（第21図）

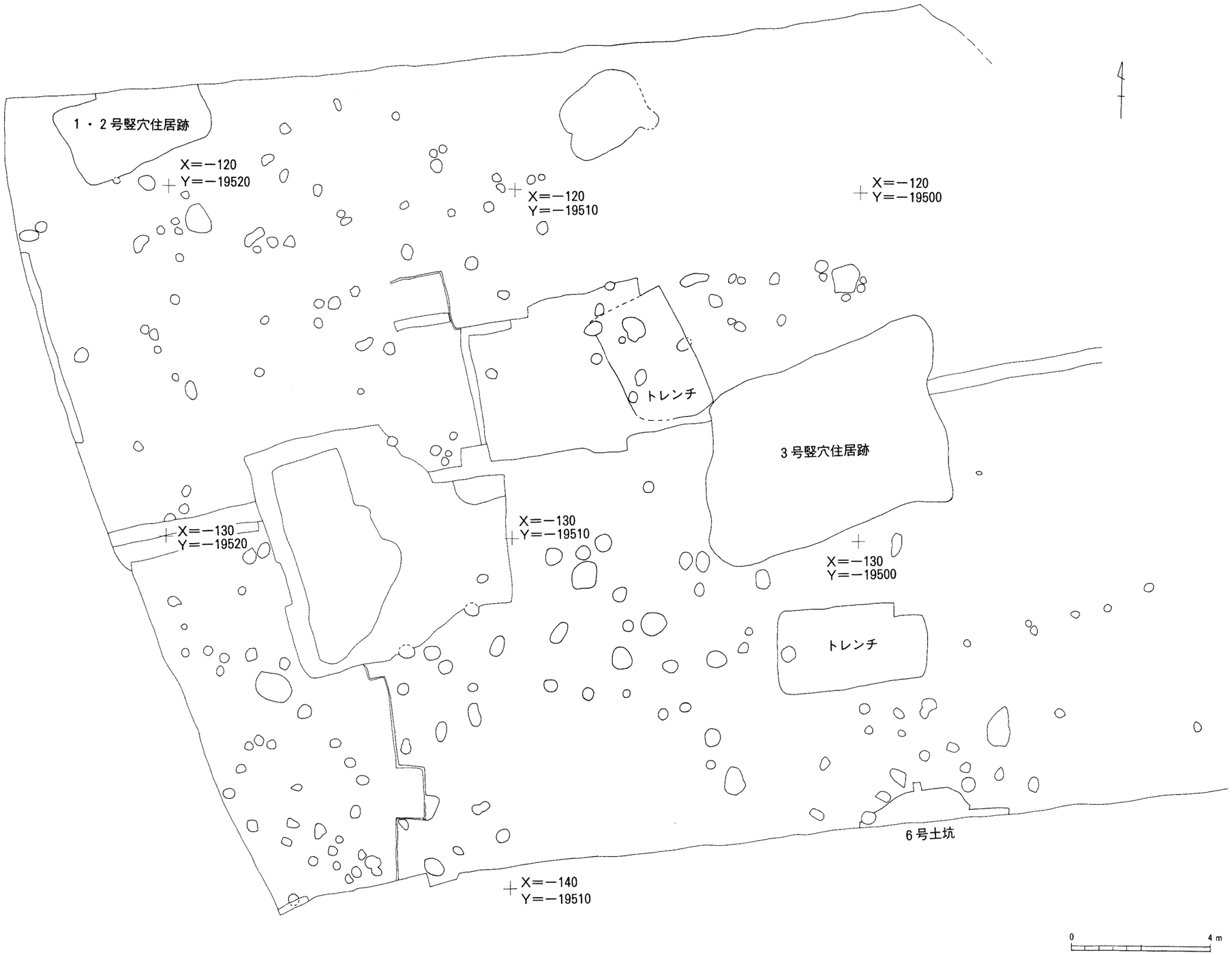
最も南側に位置する調査区で、県教委の第１７次調査で発掘された95－道路区に隣接している。95－道路区の調査では、竪穴住居跡１基、掘立柱建物跡３棟などの遺構が発見されている。この調査区も耕地整理で削平を受けていた。調査区の北と西側はⅢ層が残り、竪穴住居跡が検出できたが、南と東側は削平され、表土を剥いだ時点で黄褐色粘質の地山が見えている状態だった。Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げでは土器が出土していて、出土量は比較的多かったが細かい破片がほとんどで、接合できる資料は大変少なかった。

５区の北側では４号竪穴住居跡、１号掘立柱建物跡のほか多数のピットが検出されている。一方、地山まで削平された南側や東側で検出されたピットは少なかった。

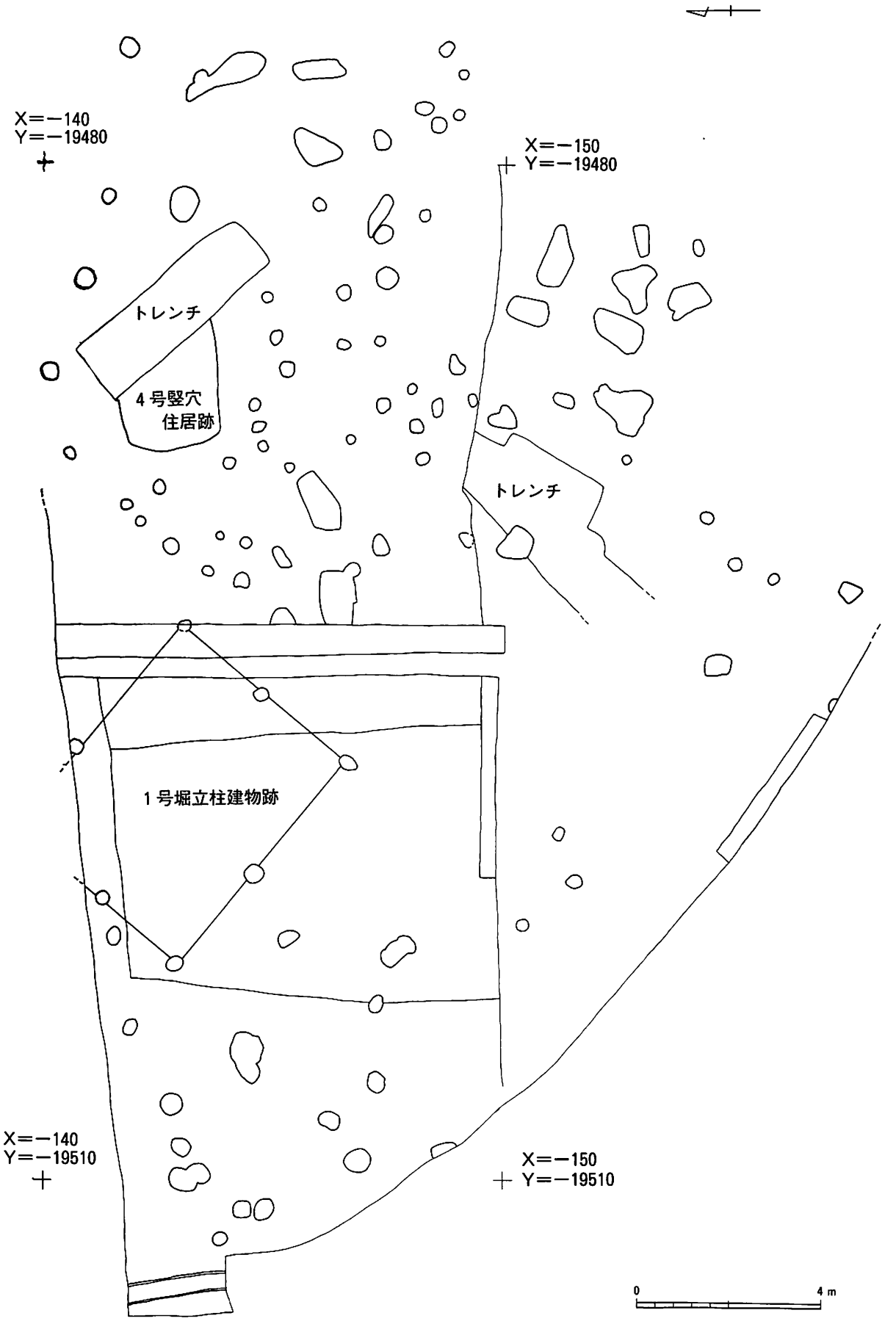
調査区出土の遺物

第22図１～３は各調査区で出土した石器で、石材はすべて黒曜石である。１は４区Ⅳ層より出土した二次加工剥片である。自然面を残しているが、左側縁と右側の一部に細かい調整を加えている。２は５区Ⅲ層出土のナイフ形石器である。３は２区ピットより出土した打製石鏃で、破損しており基部の加工は不明である。

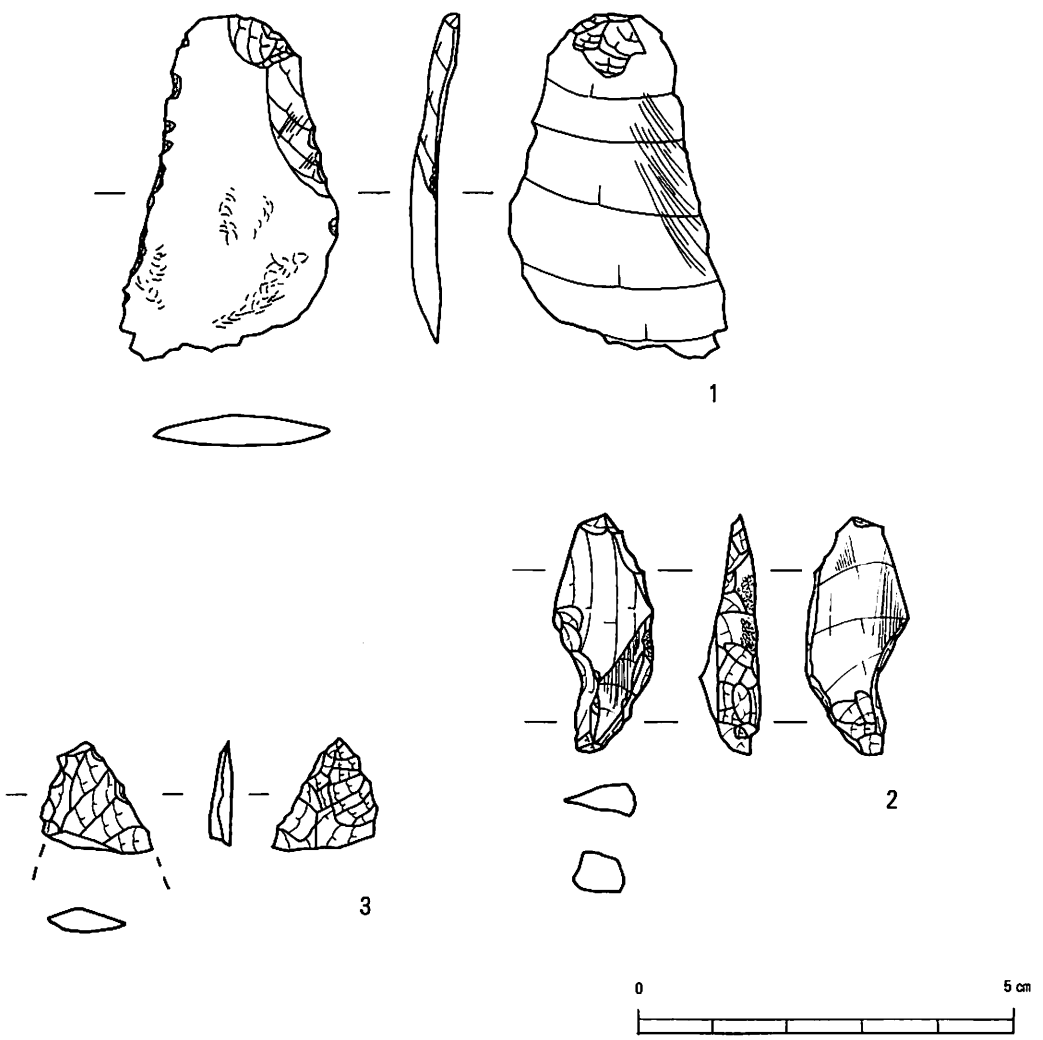
第23図は調査区から出土した土器などで、表土やこれに近い層位からの出土である。１は深鉢形土器の口縁部で、外面に数条の太い沈線が入っている。２は４区Ⅲ層から出た土器底部である。若干あげ底にしている。３は土器底部で、体部へと開き気味に立ち上がっている。４は平底土器で、体部へ直線的に移行する器形で復元底径は6.6cmである。５は甕形土器の底部～脚部の土器で、外面は横方向ハケ目のあとにナデ調整を施している。６は５区の表土より得られた土師器坏底部で、高台の一部が残っている。７は５区攪乱層からでた土師器の把手で、ナデで仕上げている。８・９は須恵器で、８は蓋のつまみ部で、直径は2.6cmを測る。表採資料である。９は坏口縁部で、立ち上がりはほぼ直立する。10は表採された須恵質の円面硯脚部で、胎土はよく精選されている。脚端部と体部とを接合させて成形している。11は４区攪乱層より出土した肥前系染付碗で、外面に花を描き、見込みにも文様を施す。見込みでは蛇の目状に素地を削り、全面施釉後くぼんでいる部分に白色の粘土をいれ、溶着を防止している。年代は19世紀後半とみられる。



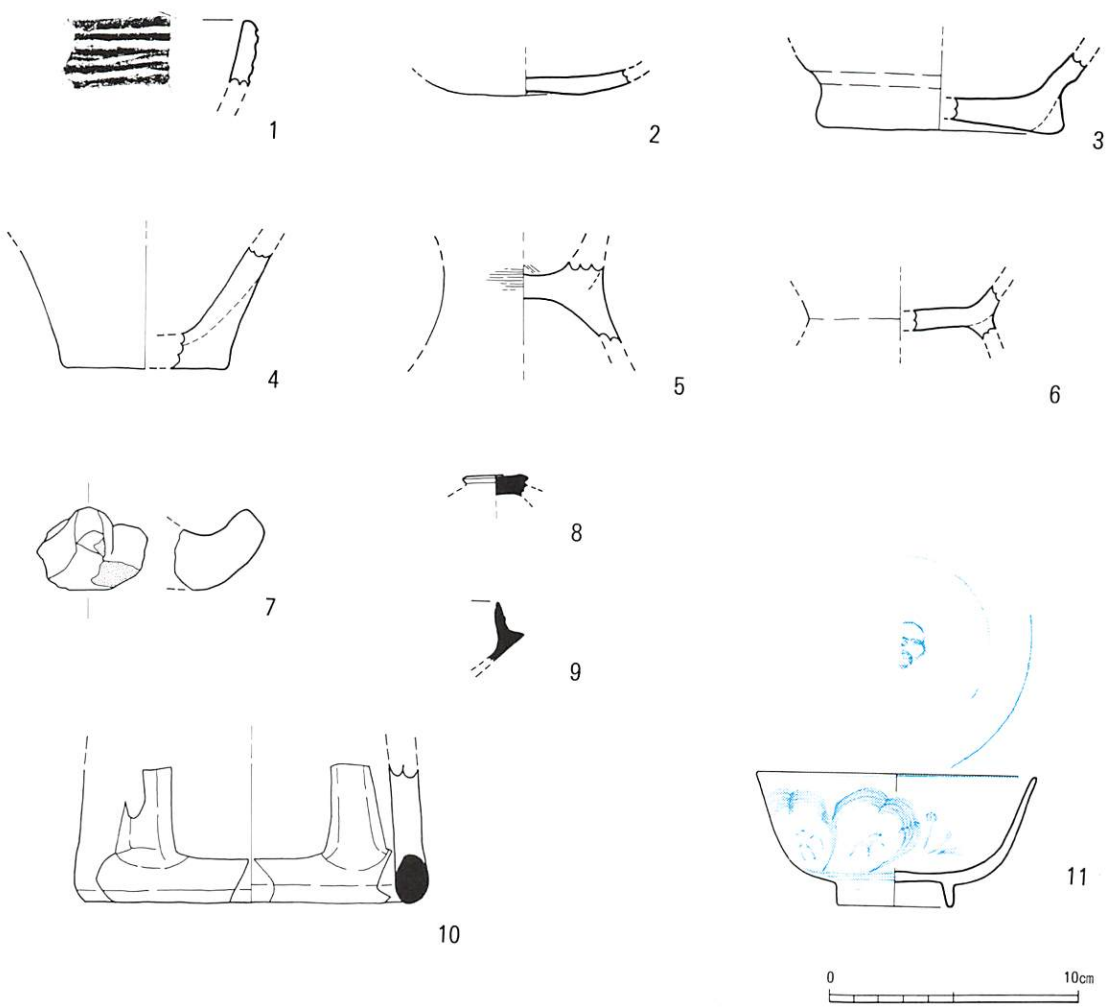
第20図　上原4区遺構実測図



第21図　上原5区遺構実測図



第22図　調査区出土石器実測図



第23図　調査区出土遺物実測図

第5図

No	出土地点	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	口唇・底部	焼成	備考
1	上原2区 1号甕棺	弥生中期甕形土器 底部～口縁部	口径 29.8 底径 7.5 高さ 44.0 厚さ 0.4～1.0	内 口縁～体部中位 灰褐色 体部下位～底部 灰黒色 外 淡黄褐色 底部 灰黒色	中型砂粒少量	口縁～突帯 丁寧なナデ 突帯直下から底部 縦方向ハケ目	口縁～胴部下位 丁寧なナデ 内底部 ナデ	口唇 丁寧なナデ 底部 ナデ	やや 不良	2箇所に穿孔

第10図

No	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	口唇・底部	焼成	備考
1	3号竪穴住居跡 No1、2など	覆土	弥生甕形土器 口縁部～体部	口径 (21.6) 高さ (26.7) 厚さ (0.4～0.6)	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色、黒色	細砂粒中量 金雲母少量	斜めハケ目 タタキ、縦ハケ目	横ハケ目、ナデ 縦、斜めハケ目	横方向ナデ	やや 良	接合
2	3号竪穴住居跡 No49、77	覆土	弥生甕形土器 口縁部～体部	口径 (21.6) 高さ (6.9) 厚さ (0.4～0.7)	頸部より上灰白色 頸部より下灰黒色 外淡黄褐色、灰黒色 スス付着	細砂粒少量	縦方向ハケ目 →ナデ タタキ→ナデ	斜め方向ハケ目 横方向ハケ目 縦方向ハケ目	横方向ナデ	良	
3	3号竪穴住居跡 No20、100	覆土	弥生甕形土器 口縁部	口径 (18.8) 高さ (3.8) 厚さ (0.5～0.6)	淡黄褐色	中型砂粒少量 細砂粒多量	横方向ナデ 斜め方向ハケ目 →ナデ	斜め方向ハケ目 横方向ナデ	横方向ナデ	良	
4	3号竪穴住居跡 No32、66、104	覆土	弥生甕形土器 口縁部	口径 (18.8) 高さ (3.8) 厚さ (0.5～0.6)	淡黄褐色	中型砂粒少量 細砂粒多量	縦方向ハケ →ハケ	横方向ナデ		良	
5	3号竪穴住居跡	覆土	弥生甕形土器 口縁部	高さ (5.4) 厚さ (0.4～0.5)	内灰白色、灰黒色 外淡黄褐色、灰黒色	中型砂粒多量	縦·斜方向ハケ目 →ナデ	斜め方向ハケ目 →ナデ	ナデ	良	
6	3号竪穴住居跡 No19	覆土	弥生甕形土器 口縁部	口径 (26.4) 高さ (4.3) 厚さ (0.5～0.8)	淡黄褐色	細砂粒多量	横方向ナデ 縦方向ハケ目	横ハケ目→ナデ 横方向ナデ、ナデ	ナデ	良	
7	3号竪穴住居跡 No4、79	覆土	弥生甕形土器 脚部	脚部径 10.2 高さ(4.4) 厚さ (0.4～0.9)	淡黄褐色	細砂粒少量	横方向ナデ	ヘラ調整	脚内面 横方向ナデ	良	
8	3号竪穴住居跡 No50、101、110	覆土	弥生甕形土器 体部	厚さ (0.9～1.1) 高さ (15.0)	内淡黄褐色 外淡黄褐色、灰黒色	細砂粒多量	平行タタキ→ 縦方向ハケ目	ハケ目 ヘラ調整		良	

第11図

No	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	口唇・底部	焼成	備考
1	3号竪穴住居跡 No26	覆土	弥生壺形土器 口縁部	高さ (7.9) 厚さ (1.0～1.5)	淡黄褐色	細砂粒多量 金雲母微量	刺突文 丁寧なナデ 横→縦方向 ハケ目	横方向ナデ 横方向ハケ目 斜め方向ハケ目 →ナデ	刺突文	良	
2	3号竪穴住居跡 No10	覆土	弥生壺形土器 口縁部	高さ (1.9) 厚さ (0.6～1.0)	淡黄褐色	金雲母微量 細砂粒多量	斜め方向ハケ目 →ナデ	横方向ナデ	横方向ナデ	良	
3	3号竪穴住居跡 No91	覆土	弥生小型丸底壺 肩部～口縁部	口径 (11.4) 高さ (4.6) 厚さ (0.6)	灰褐色	細砂粒多量 黒雲母中量	横方向ナデ	横方向ナデ	ナデ	良	
4	3号竪穴住居跡 No21、96	覆土	弥生鉢形土器 体部～口縁部	口径 (17.4) 高さ (7.5) 厚さ (0.4～0.5)	内淡黄褐色 外淡黄褐色、黒色	細砂粒多量 金雲母少量	横方向ハケ目 斜め方向ハケ目 →ナデ	丁寧なナデ→ ヘラナデ (暗文)	ヘラナデ	良	
5	3号竪穴住居跡 No23	覆土	弥生鉢形土器 口縁部	高さ (3.1) 厚さ (0.5～0.6)	暗褐色	細砂粒少量	斜め方向ハケ目 →ナデ	丁寧なナデ	ヘラナデ	良	
6	3号竪穴住居跡 No44	覆土	弥生鉢形土器 口縁部	高さ (2.8) 厚さ (0.4～0.6)	淡黄褐色	細砂粒少量	ナデ	丁寧なナデ	ヘラナデ	良	
7	3号竪穴住居跡 No89	覆土	弥生鉢形土器 口縁部	高さ (2.5) 厚さ (0.4～0.6)	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色、黒色	細砂粒少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	

No	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
8	3号竪穴住居跡 No83	覆土	砥石	砂岩	11.8	9.5	6.1	800	
9	3号竪穴住居跡	ピット内	勾玉	蛇紋岩？	1.4	0.5	0.3	—	頭部欠損 孔径(2.5mm)

No	出土地点	層	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
10	3号竪穴住居跡	覆土	鉄製鋤先	3.2	7.5	0.2～0.5	13.0	木質が残る 錆付着

第13図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	4号竪穴住居跡 No.2	覆土	弥生高坏形？土器 口縁部	口径（14.0） 高さ（2.7） 厚さ（0.4）	赤褐色（彩色）	細砂粒微量	横方向ナデ 彩色	横方向ナデ 彩色	ナデ	良	
2	4号竪穴住居跡 No.8	覆土	弥生甕形土器 口縁部	高さ（3.1） 厚さ（0.7～2.1）	内 淡黄褐色 外 黄褐色	中型砂粒多量 細砂粒微量	横方向ナデ	横方向ナデ	横方向ナデ	良	
3	4号竪穴住居跡 No.4	覆土	弥生甕形土器 口縁部	高さ（1.1） 厚さ（1.0）	淡黄褐色	中型砂粒多量 細砂粒微量	横方向ナデ	横方向ナデ	刻目	良	

No.	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
4	4号竪穴住居 No.14	覆土	石皿	安山岩	20.3	15.3	9.3	4400	

第17図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇	焼成	備考
1	上原2区 3号土坑	覆土	弥生壺形土器 口縁部	口径（22.6） 高さ（3.7） 厚さ（0.4）	内外とも 淡褐色 口唇部 淡黄褐色 灰黒色	細砂粒多量 中型砂粒多量	横方向ナデ 線刻	横方向ナデ	ナデ	良	2箇所に線刻

第22図

No.	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	上原4区	Ⅳ	二次加工剥片	黒曜石	4.3	2.4	0.2～0.5	5.0	
2	上原5区	Ⅲ	ナイフ形石器	黒曜石	3.0	1.3	0.4～0.6	2.5	
3	上原2区	ピット	打製石鏃	黒曜石	1.4	1.4	0.1～0.3	1.0	

第23図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内／外)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	上原5区	Ⅰ	縄文深鉢形土器 口縁部	高さ（2.6） 厚さ（0.7～0.8）	内 灰褐色 外 淡黄褐色 黒色	細砂粒多量	沈線	条痕 ナデ	ナデ	良	
2	上原4区	Ⅲ	縄文土器底部	底径 4.4 高さ（1.0） 厚さ（0.5～0.7）	内 黒色 外 淡黄褐色	細砂粒多量	丁寧なナデ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	良	
3	上原5区	Ⅲ上面	縄文土器底部	底径（9.8） 高さ（3.2） 厚さ（0.7～1.5）	内 淡灰褐色 外 淡黄褐色	中型砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
4	上原2区	ピット	弥生土器底部	底径（6.6） 高さ（4.9） 厚さ（0.9～2.1）	内 淡黄褐色 外 淡赤褐色	中型砂粒多量 細砂粒少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
5	上原4区	Ⅰ	弥生甕形土器 脚部	甕底部径 6.4 高さ（3.3） 厚さ（0.8～1.4）	淡黄褐色	中型砂粒少量 細砂粒多量 黒雲母微量	ナデ 横方向ハケ目 →ナデ	甕内面 斜め方向ハケ目 →ナデ 脚内面 ナデ		良	
6	上原5区	Ⅰ	土師器高台付坏 高台～坏底部	坏底径（7.4） 高さ（2.2） 厚さ（0.6～0.8）	淡茶褐色	中型砂粒中量 細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	良	
7	上原5区	撹乱	土師器甑把手	把手厚さ（1.6～2.2）	淡黄褐色	細砂粒多量	ナデ			良	
8		表面採集	須恵器坏蓋 つまみ部	つまみ径2.6 高さ（1.3）	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ		良	
9	上原5区	Ⅰ	須恵器坏口縁部	高さ（2.4） 厚さ（0.4）	青灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
10	上原2区	表面採集	須恵質円面硯	脚径（14.2） 高さ（5.5）	淡桃色	細砂粒微量	ナデ	ナデ	ナデ	やや不良	
11	上原4区	撹乱	染付碗 底部～口縁部	口径（11.2） 高台径（4.6） 高台高 0.9 高さ 5.3 厚さ 0.3～0.5		精良	花文	圏線		良	

第Ⅲ章　まとめ

ここでは上原地区の調査について調査のまとめと若干の考察を行う。

上原地区について

本報告で扱った鞠智城跡上原地区では過去数回の調査が行われており、数棟分の建物跡が検出されている。

また、町道を挟んだ長者原地区では、数十棟分の建物跡が確認されている。このため城内の敷地利用について、上原地区は兵士の訓練場としての機能を持った「練兵場ゾーン」などとされている。

さて、第Ⅱ章で述べたとおり、今回の調査では弥生時代中期や後期末頃の遺構・遺物が数多く発見されたが、鞠智城の時代と見られる建物跡などの遺構は発見されず、古代の遺物も表土や客土層などから少量の出土にとどまっている。長者原地区では弥生時代の住居跡が数棟見つかっているが、北西谷部に造られた貯水池跡の下層から大量に縄文土器、弥生土器が出土している。このことは鞠智城の築城あるいは修理に伴って長者原地区で大規模な造成や改変が行われたのに対し、上原地区では弥生時代の層まで及んでいないことを示している。よって、鞠智城跡は上原地区東側一帯の崖面までを城域として取り込んでいながら、上原地区には大規模な造成を行っていなかったと言えよう。必ずしも明確にはなっていない上原地区の意味や機能を知る上で見過ごしてはならないことである。

遺構・遺物について

1．甕棺

甕棺の体部２カ所に穿孔があることは触れたが、取り上げたときには気付いていなかった。接合復元し図面と照らし合わせたところ、埋葬したとき孔が下の面になっていたことがわかった。２つとも外面からの穿孔で、埋める前にはあけていたこととなる。

蓋石は鞠智城跡の礎石として使われた凝灰岩ととてもよく似ており、最初は建物礎石が出たのかとあわてて露出させてみると甕の破片が出土し、ようやく石蓋の甕棺と判明した。鞠智城礎石の凝灰岩は比較的硬質で、採石地は直線距離で３ｋｍほど離れた内田川の川底と推定されている。

今回報告した甕棺は１基のみであったが、第15次調査報告書でも同様の甕棺が複数報告されているように、上原地区の中でも限られた範囲に弥生中期の墓域の存在を伺うことができる。他の生活域に関しては、米原台地全体を含めて考えるべきであるが、いまのところ４号住居跡が居住域の一部として想定できる。

2．３号竪穴住居跡・出土土器

最も多くの土器が出土した３号竪穴住居跡は、上原地区で検出した竪穴住居跡の中でも中心となる遺構である。１・２号竪穴住居跡は時期決定の根拠となる出土遺物が少なく、単純に３号竪穴住居跡と比較できないものの、１号竪穴住居跡からは弥生後期土器と見られる小破片が出土しており、これに近い時期とみて差し支えないとかんがえられる。これから、３号竪穴のような大型のものとそれ以外の小型に分けられる。大型の竪穴住居跡には土器ばかりでなく鉄器（第11図10）も出土している。

３号竪穴住居跡の時期については、地理的にも時期的にも近い鹿本町津袋遺跡と七城町うてな遺跡の資料による土器編年を参考にした。３号竪穴住居跡出土土器は器種が甕、壺、鉢形土器で、高坏や器台などを欠く。甕形は、体部最大径が中位にあり、外器面の調整はタタキ目を残し、脚部は「八」の字形に開く器形である。鉢形は丸い体部に直立する口縁部が付く。壺形では小型丸底壺が出ている。これらはうてなＢ期の土器と同時期と見られ、弥生後期末頃に比定できる。

特にうてな遺跡は鞠智城跡南側の谷部を挟んだだけの近い距離にあり、遺跡の規模・出土遺物などから考えると、うてな遺跡から大きな影響を受けていたことが考えられる。

3．線刻土器

3号土坑から第17図の線刻土器が出土している。線刻は2種あり、そのどちらも土器の割れによって全体の形がわからないが、なんらかの意図をもって線が刻まれていることは間違いない。

参考文献

高木　正文　「鹿本地方の弥生後期土器」　『古文化談叢』　第6集　１９７９年

野田　拓治　「古式土師器の成立と展開」　『森貞次郎博士古希記念　古文化論集』　１９８２年

『うてな遺跡』　熊本県文化財調査報告第121集　１９９２年

『狩尾遺跡群』　熊本県文化財調査報告第131集　１９９３年

『鞠智城跡　―第18次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第164集　１９９７年

『鞠智城跡　―第19次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第169集　１９９８年

本来、調査に至る経緯などで上原地区の過去の発掘調査についてもまとめるべきだが筆者の力が及ばずまとめることができなかった。そこで以下の報告書を列記しておくので以前の調査区に関してはこちらを参照して下さい。

『鞠智城跡』　熊本県文化財調査報告第59集（第Ⅶ章　第五次調査の成果）　１９８３年

『鞠智城跡　―第10次～第12次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第116集　１９９１年

『鞠智城跡　―第13次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第124集　１９９２年

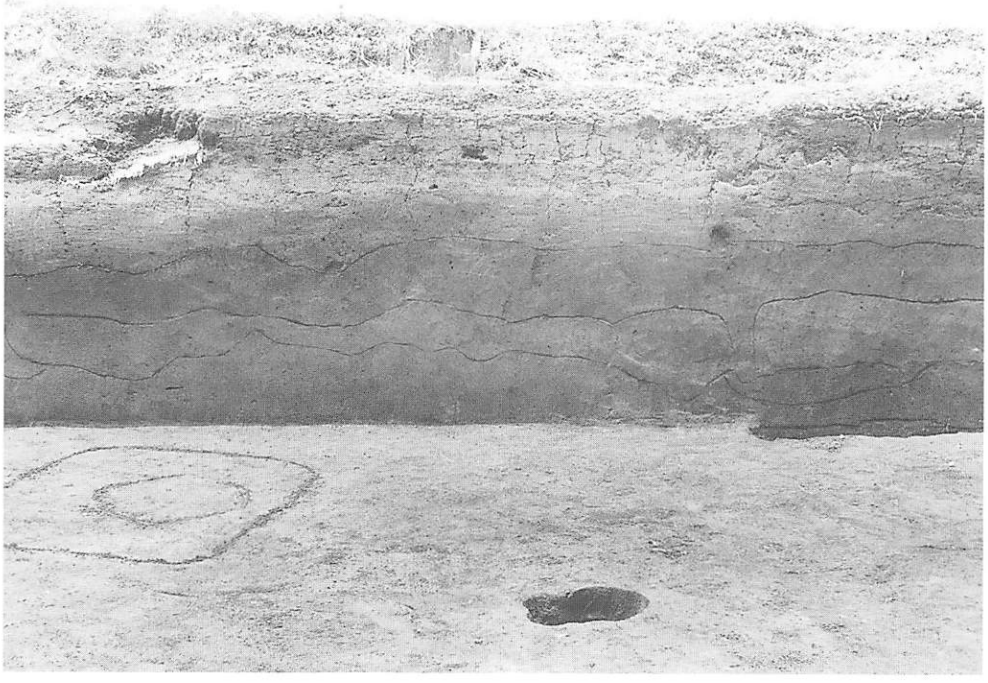
『鞠智城跡　―第15次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第146集　１９９４年

『鞠智城跡　―第17次調査報告―』　熊本県文化財調査報告第157集　１９９６年

図　　版

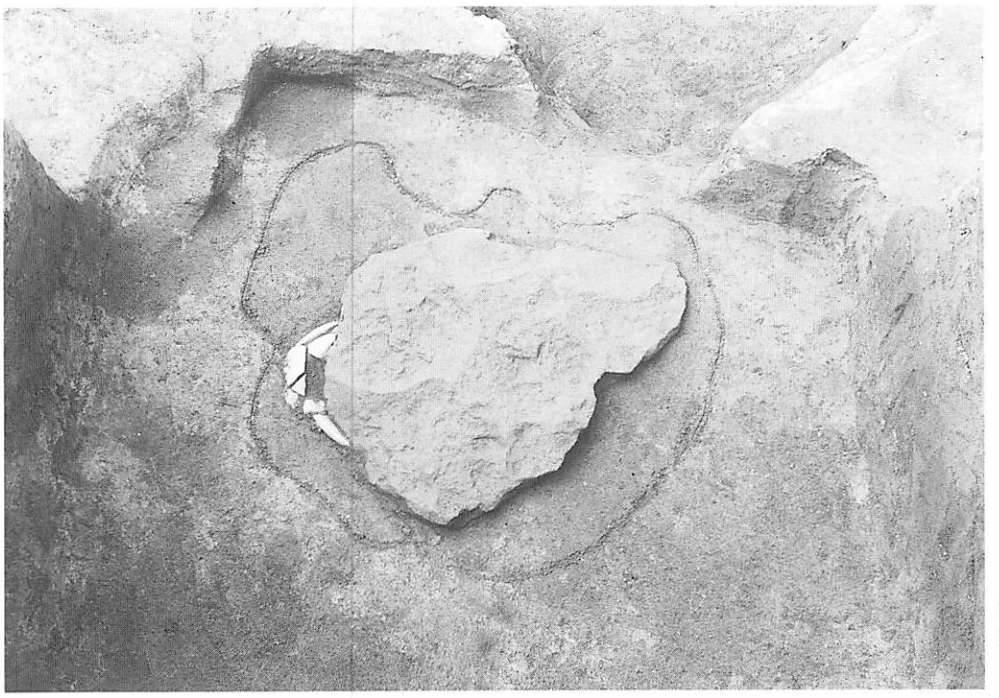
調査区全景
（南西より）

調査風景

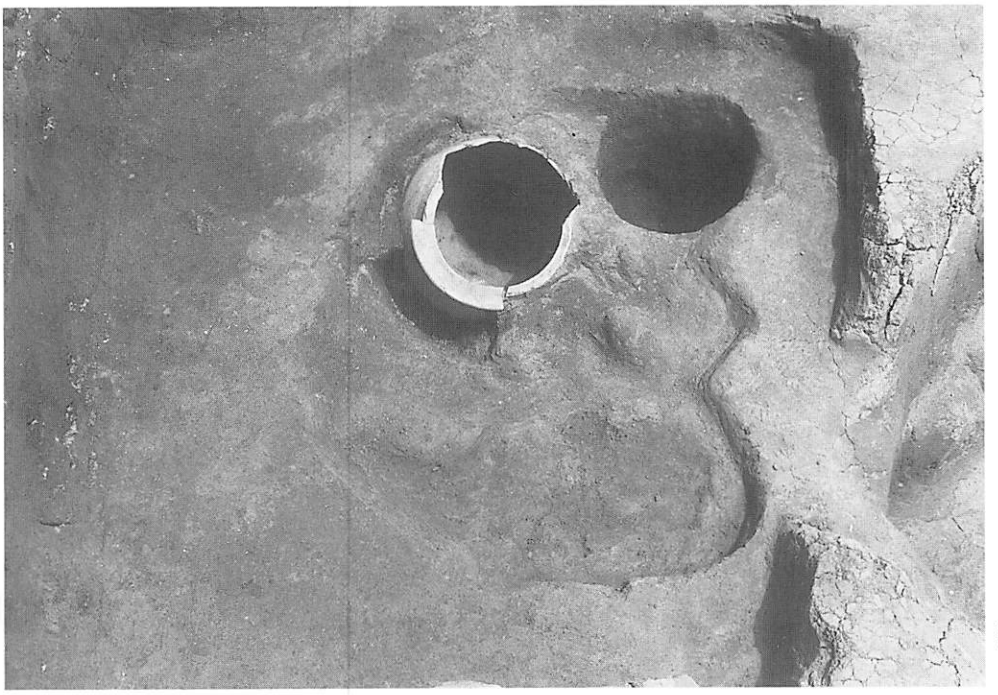


上原地区
基本土層
（東から）

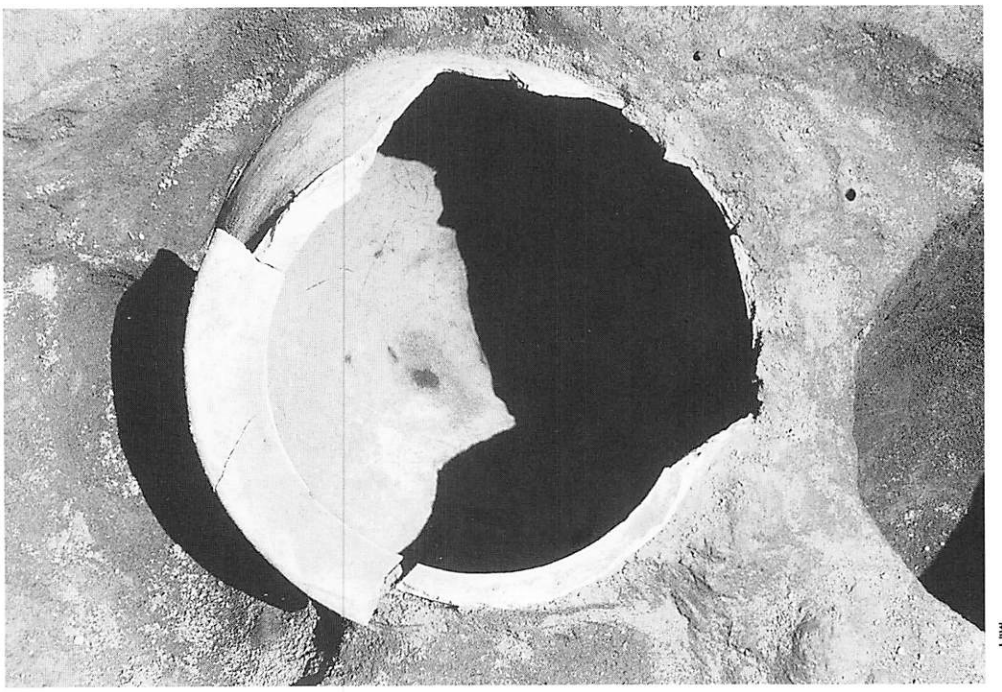
図版 2



2区甕棺
検出状況
（東から）



甕棺石蓋除去後
（北から）



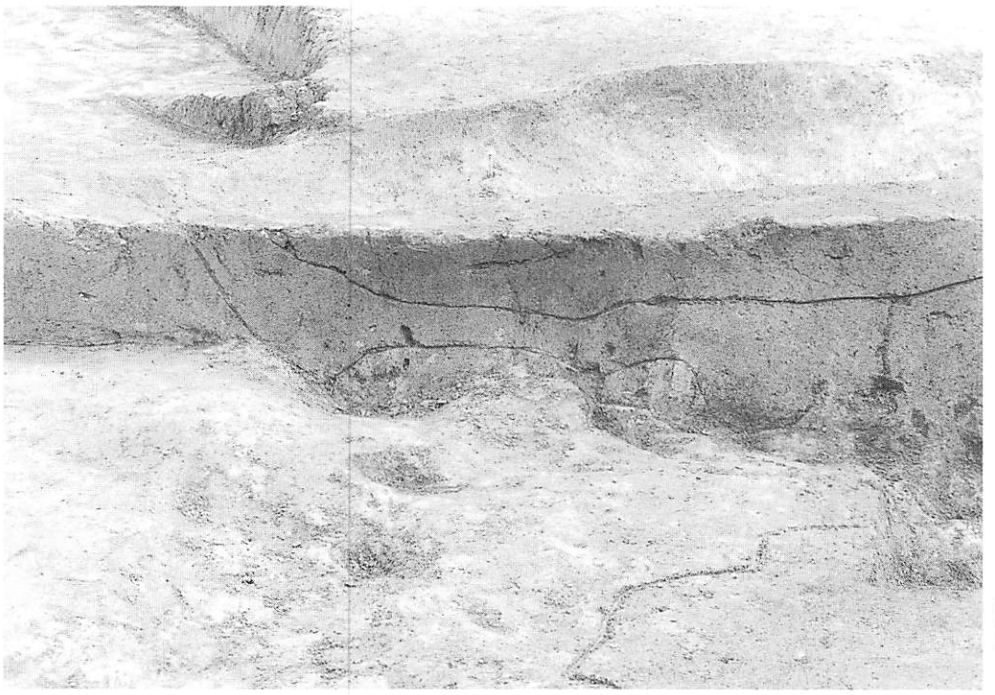
甕棺接写
（南から）

1号竪穴住居跡
炭の集中
（南から）

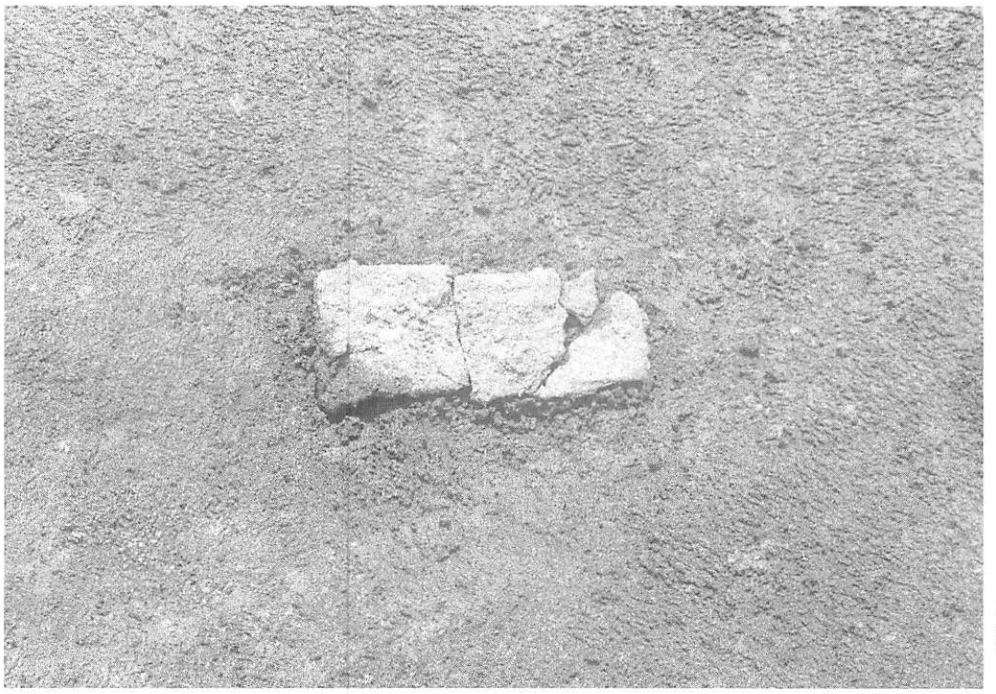
1号竪穴住居跡
（西から）

2号竪穴住居跡
（西から）

図版 4

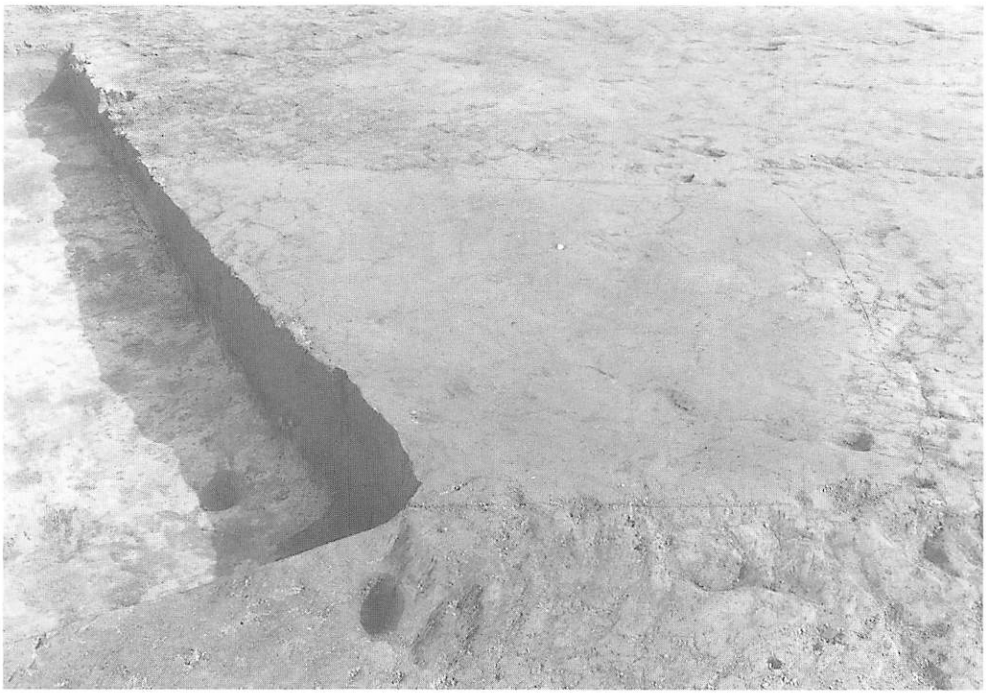


3号竪穴住居跡
断面の一部
（南から）



3号竪穴住居跡
鉄製品出土状況
（北から）

3号住居跡
（東から）



4号竪穴住居跡
検出状況
（北から）

4号竪穴住居跡
土器出土状況
（東から）

4号竪穴住居跡
（東から）

図版 6

上原3区全景
（東から）

上原4区全景
（東から）

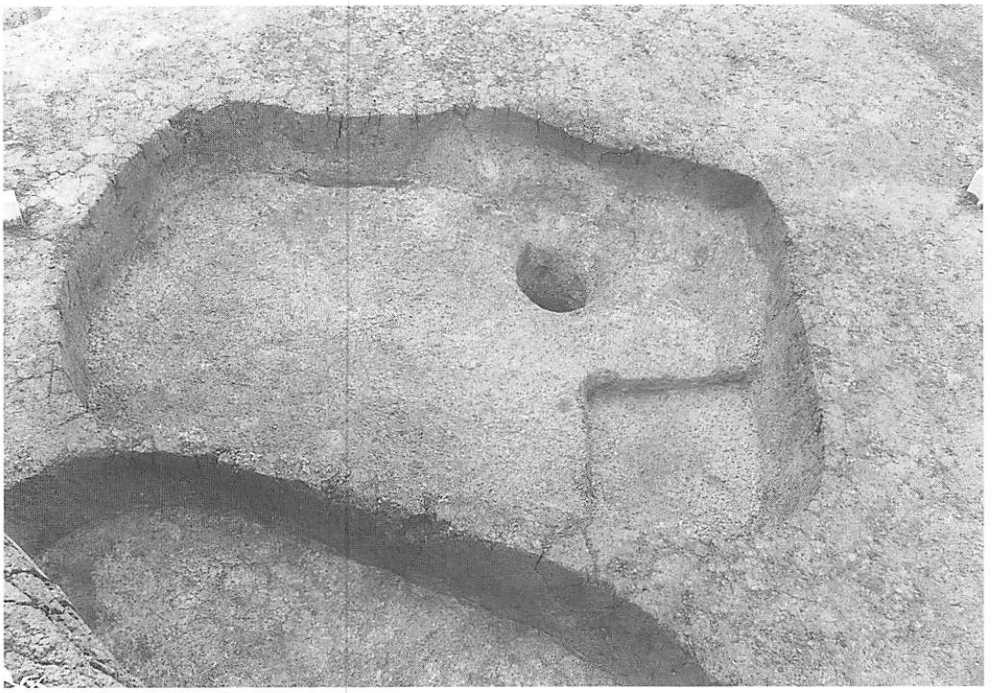
上原5区全景
（東から）

1号土坑
（西から）

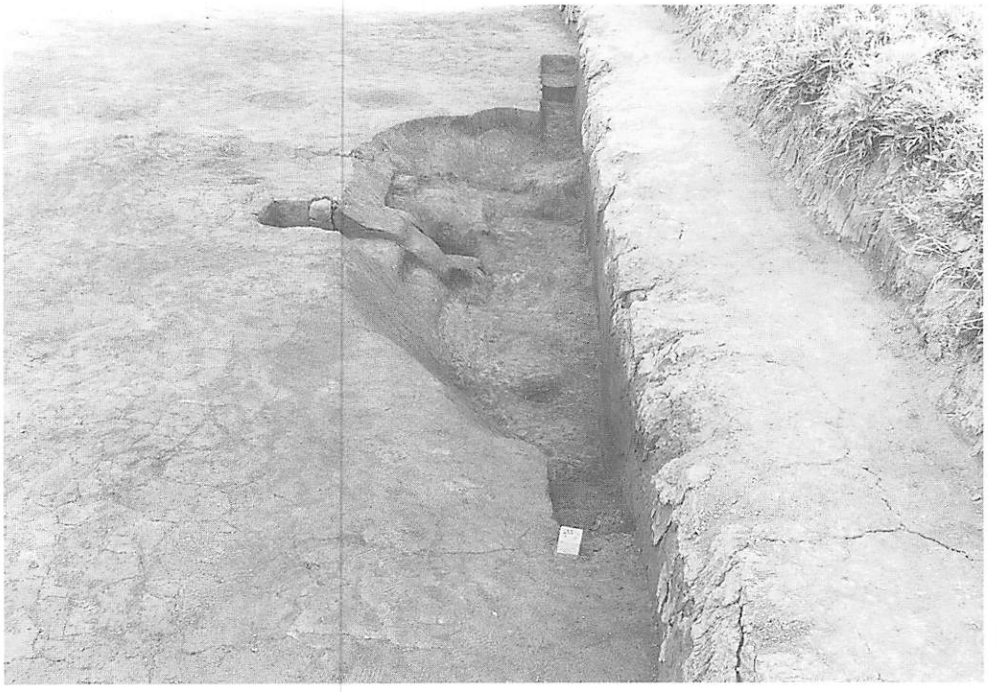
2号土坑
（西から）

3号土坑
（西から）

4号土坑
（南西から）

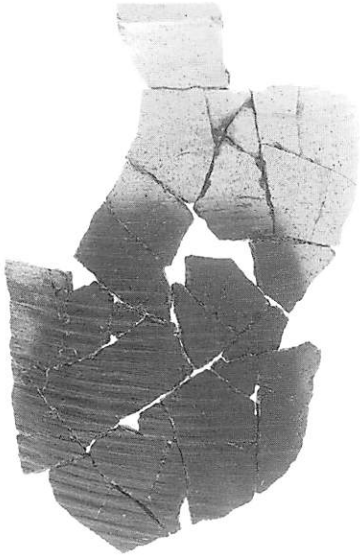


5号土坑
（北から）

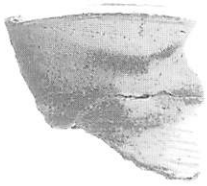


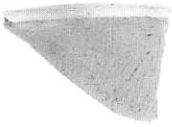
6号土坑
（西から）

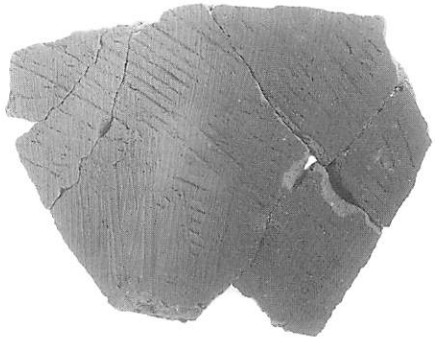
第5図
甕棺



第10図1

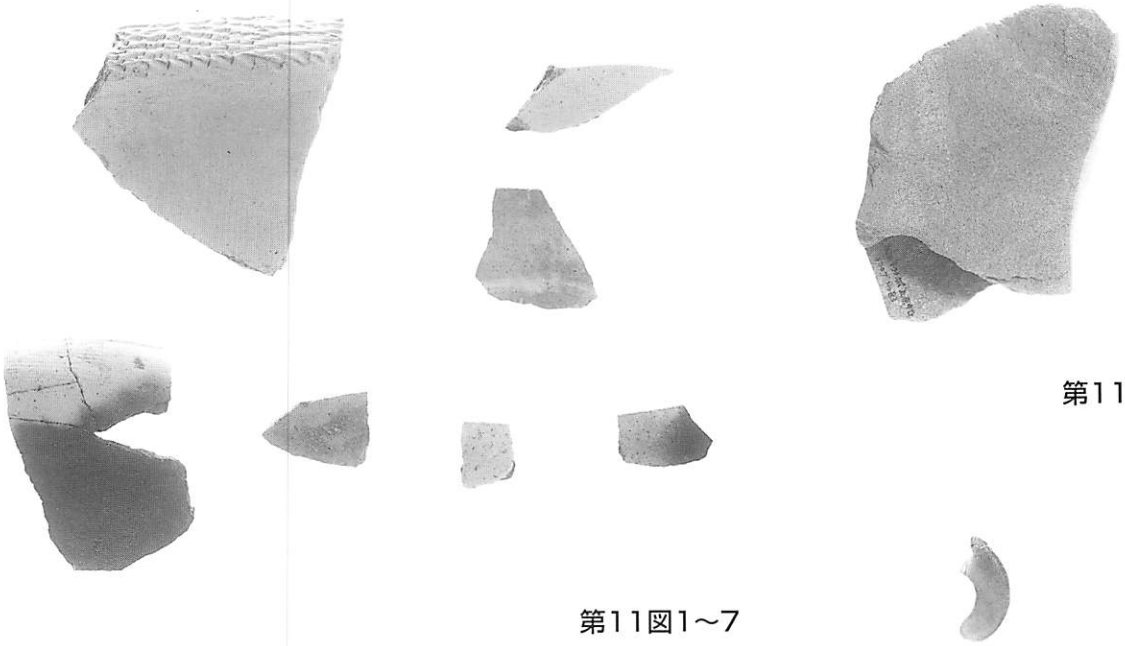






第10図2～6,8

第10図7

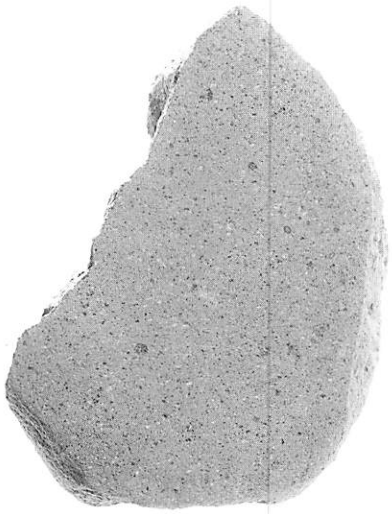


第11図8

第11図1～7

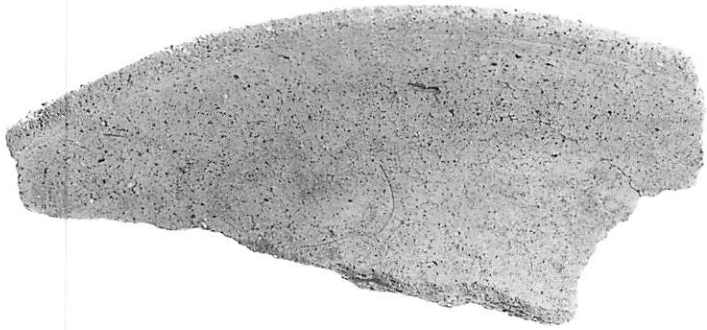
第11図9

第13図1～3



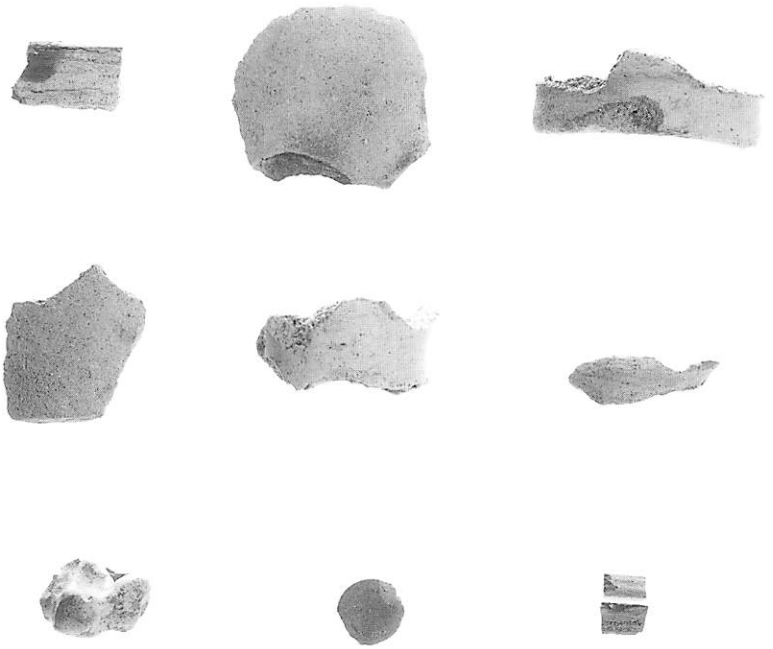
第13図5

第17図



第17図　拡大

第22図



第23図1～9

第23図10

第23図11

報 告 書 抄 録

書　　名	鞠智城跡
副　書　名	町道稗方立徳線付け替えに伴う上原地区の埋蔵文化財調査
シ リ ー ズ 名	菊鹿町文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第９集
編 著 者 名	古閑敬士
編 集 機 関	菊鹿町教育委員会
所　在　地	〒８６１－０４０６　熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田１６５
発 行 年 月 日	２００１年3月３１日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
鞠 智 城 跡	鹿本郡菊鹿町大字米原	43　382：100	200004 ～200008	約2,800㎡	町道付け替え

時　代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
縄文		縄文土器	
弥生	甕棺１号 住居跡４基	弥生後期土器 鉄製品	甕棺に穿孔を施している 線刻土器
古代		土師器 須恵器 円面硯 瓦	

菊鹿町文化財調査報告　第９集

鞠　智　城　跡

町道稗方立徳線付け替えに伴う上原地区の埋蔵文化財調査

平成13年３月31日

編集発行　菊鹿町教育委員会
〒861－0406　鹿本郡菊鹿町大字下内田１６５
TEL　（0968）48－3115

印　刷
東京ラインプリンタ印刷㈱
〒862－0935　熊本県熊本市御領6－3－65
TEL　（096）389－8288㈹